

JISS Bulletin

一般社団法人スウェーデン社会研究所 所報 第387号 2026年3月発行

【スウェーデンの点描】

スウェーデンの国籍取得の厳格化

2026年2月、スウェーデン政府は国籍取得条件を厳格化する計画を発表しました。スウェーデンはこれまで、国籍取得に対して比較的寛大でしたが、今回の動きは、この従来の方針を転換するものとなります。

まず居住期間の要件を、従来の5年から8年に引き上げます。さらに申請者は、一定レベルの語学力と、スウェーデンの社会文化に関する知識が求められるようになります。また申請者は、経済的に自立していることを証明しなければなりません。具体的には月給2万SEK（約34万円）の収入を証明する必要があります。さらに新しい法律では、申請者が過去に犯罪を犯していないことが重要視されています。国内であれ国外であれ犯罪を犯した人については、国籍取得の申請までに必要となる居住期間が、より長くなります。

スウェーデンの国籍取得の厳格化は、社会統合と治安を目的とした政策として位置づけられており、より多様性があるながらも統一感のある社会の構築が期待されています。しかし、移民コミュニティにとっては、新たな課題を伴うものとなるため、今後の動向に注目が集まっています。



写真：Simon Paulin/imagebank.sweden.se

目次

【スウェーデンの点描】
スウェーデンの国籍取得
の厳格化 1

2025年度の研究講座
..... 2

Sweätters2025年度活動
報告 5

明治大学国際日本学部鈴木
木ゼミ研究報告..... 11

①2026年1月研究講座
第15期研究発表会

②『スウェーデン流 夢を
描ける子どもの脳の育て
方』講演会を通して

③北欧×日本インタビュー
～多様な分野の当事者が語
る北欧からみる日本と日本
からみる北欧の実像～

④政治をもっと身近なもの
に～高校における授業実
践からの学び～

⑤日本から見た北欧の魅
力～万博アンケート・イン
タビュー・ムーミンから読
み解く～

⑥未来の働き方の模索：ワ
ークライフインテグレイシ
ョンの可能性～

2025年度の研究講座

2025年4月 『移民と共生を目指す国、スウェーデンの現実』



スウェーデンから、一緒に幸せのヒミツを見つけよう！

スウェーデン人はどう思っている？暮らして感じるホンネ

- スウェーデン人もホンネとタテマエ？
- 治安悪化は移民のせい？
- 高福祉高負担のワナへ性善説の上に成り立つ仕組み？



ノードラボ北欧研究室、室長のダールマン容子さんをお招きして、お話をうかがいました。約20年間に及ぶスウェーデンでの生活や、YouTubeをはじめとしてスウェーデンと日本の架け橋となる活動をされる中での様々なご経験について、特に最近のスウェーデンにおける重要なトピックである移民や治安に関することに力点を置きつつ、様々なお話を聞かせていただきました。

2015年よりスウェーデンのストックホルムを活動の拠点として生活され、ヴィルヘルム・ステーンハンマルを始めとするスウェーデン作曲家の音楽作品を演奏を通して研究し広めることをライフワークの一つとされ、本研究所の会員でもいらっしゃるピアニストの和田記代さんをお招きして、クラシック音楽分野における日本とスウェーデンの文化政策の共通点や相違点についてお話しいただきました。

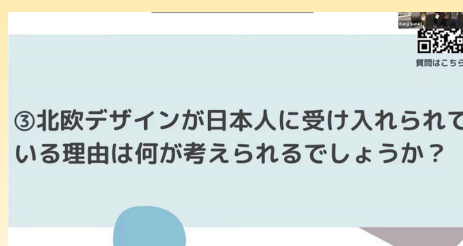
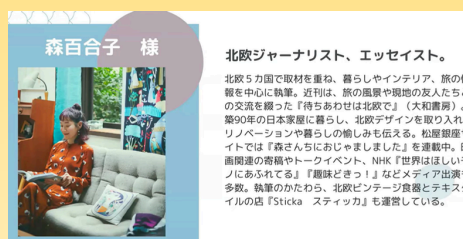
2025年7月 『スウェーデンのクラシック音楽と文化政策』



スウェーデンと日本のクラシック音楽ことはじめ



2025年8月研究講座『自分らしさを日本で彩る、北欧インテリアとスタイルからの学び』

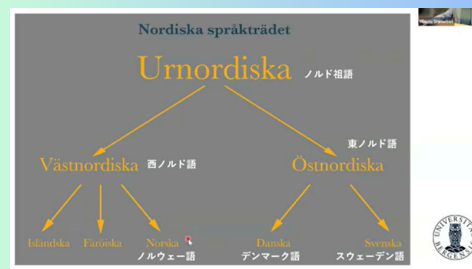
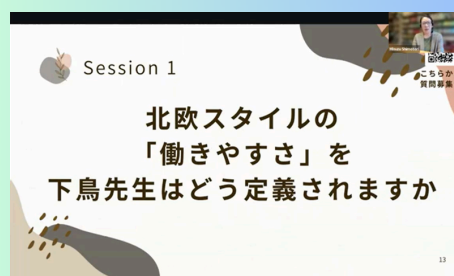


『探しものは北欧で』（大和書房）、『日本の住まいで楽しむ 北欧インテリアのベーシック』（パイ インターナショナル）ほか北欧の暮らしやインテリア、旅をテーマにした多数の著作を世に出され、その他にも各種媒体に執筆されている、ジャーナリスト・エッセイストの森百合子さんをお招きし、北欧に関連する仕事の始め方、インテリアと暮らしの結びつきや考え方、日本での北欧インテリアの実践について、お話しいただきました。

日本人ながらスウェーデンとノルウェーという2つの北欧諸国の大学における勤務経験をお持ちである、下鳥美鈴ベルゲン大学准教授をオンラインでお招きし、日本人から見たスウェーデンとノルウェー、そしてそれら両国の共通点や相違点についてお話しいただきました。また本年より本研究所における2つ目の学生団体となった、ノルウェー留学経験者を中心とするVelkommenのメンバーがホスト役を務めました。

※明治大学国際日本学部鈴木ゼミ活動報告③には、下鳥先生へのインタビューが掲載されています。

2025年10月研究講座『日本人から見たスウェーデンとノルウェー』




2025年11月研究講座『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』

■本について
『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』

2025年8月1日 第1刷発行
著者 成田奈緒子 久山葉子
発行所 株式会社ビジネス社

本の構成

- ・第1章 日本とスウェーデンの子育て・教育事情
- ・第2章 本当にお金で幸せの尺度は測れるのか
- ・第3章 スウェーデン人の価値観からヒントを探る
- ・第4章 大人も子どももメンタルが崩壊している現代社会
- ・第5章 子どもの未来を切り開く子育てを考える



発達脳科学者で大学教授でもある成田奈緒子さんと、スウェーデン在住の翻訳家でエッセイストである久山葉子さんをお招きし、お二方の著書をテーマに「こどもが自分らしく生きるための方法」について、こどもを取り巻く環境や、スウェーデンの価値観といった視点からお話していただきました。

※詳しくは、明治大学国際日本学部鈴木ゼミ活動報告②をご覧ください。

スウェーデン大使館にてご勤務されている中村裕美様をお招きし、大使館職員としてのキャリアや業務のやりがいについて、またスウェーデン大使館の活動について、お話しいただきました。

現役の大使館職員の方から直接お話を伺える貴重な機会となりました。今回はSweättersの学生たちがホスト役を務めました。

2025年12月研究講座『スウェーデン大使館職員というキャリア』



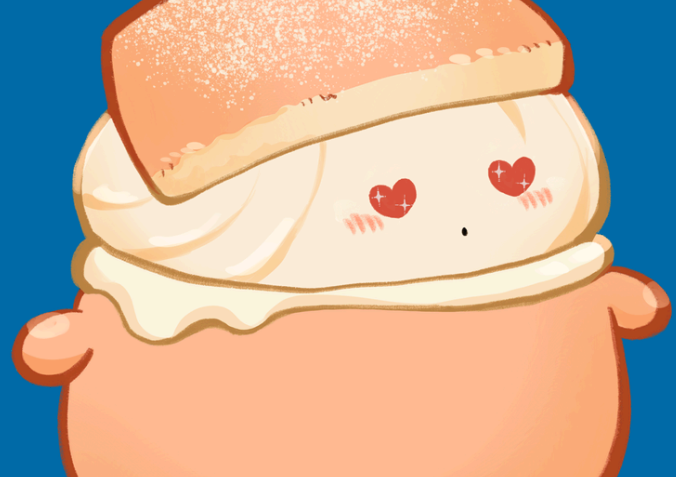
トークセッション第1部
大使館職員になったきっかけ・原体験
18:15-18:30

Q.どのようなプロセスを経て大使館職員になることができるのか？

Q.大使館職員に求められる力は？



質問



Sweäters

一般社団法人スウェーデン社会研究所 学生部

私たち Sweäters は、「学生ならではの力で、スウェーデン(北欧)と日本の人々が、互いの存在をより身近に感じられるようにする」を目的に、日本支部と北欧支部に分かれてイベントの企画・運営や情報発信を行っています。今年度は、JISS 研究講座の進行・対談に加え、国内で6つのイベントを実施し、スウェーデンでも5つのイベントを開催しました。

日本支部ではさまざまな方々のご協力を得て、食・スポーツ・学術などあらゆる面から北欧の魅力を伝えることができました。北欧支部では異なる地域に留学するメンバーが力を合わせて、50名規模のイベントを開催するなどして、日本の魅力を伝えることができました。

日本支部イベント一覧

- クップであそぼう！
- Tacos&Chokoladbollsfesten
- 森百合子様ご登壇
「北欧インテリアとスタイルからの学び」
- Sweäters×ガールスカウトの子供たち
- Enjoy Lucia Day with Sweäters
- Candle Painting Workshop
- 中村裕美様ご登壇
「スウェーデン大使館の仕事って何だろう？」
- 三遊亭好青年様ご登壇
「伝統芸能の世界『落語』と北欧」

北欧支部イベント一覧

- “Bento” workshop
~Japanese lunch time
- Japanese food Sittning
- Japanese New Year
- Re:Connect A Sustainable
Exchange Between Japan and
Sweden
- Japanese traditional summer
dancing festival

以下、2025年3月以降に開催された、計5つのイベントをご紹介します。

『ルシア祭 ～Enjoy Lucia Day with Sweaters～』

2025年12月20日 開催 @神田駅



今回は、日本人学生と日本に留学中のスウェーデン人学生の皆さんに向けて、スウェーデンの伝統行事「ルシア祭」を体験してもらうイベントを開催しました。

ルシア祭は、長い冬が続くスウェーデンで、暗い季節を明るく照らす「光のお祭り」として親しまれている伝統文化です。イベントの冒頭では、ルシア祭の歴史や意味について簡単なプレゼンテーションを行い、その背景を知ってもらいました。その後は、ルシア祭に欠かせない伝統的なお菓子を楽しんでもらいました。今回用意したのは、「ルッセカット」と呼ばれるサフラン入りのパンと、体が温まるジンジャークッキーの2種類です。ジンジャークッキーはデコレーションも体験してもらい、それぞれが思い思いに飾り付けを楽しんでいました。自然と会話も弾み、会場はとても和やかな雰囲気になっていました。イベントの最後には、ルシア祭に関するクイズ大会を行い、楽しみながらスウェーデン文化を学べる時間となり、無事にイベントを終えることができました。参加者の方からは、「普段あまり触れることのないスウェーデン文化を知ることができて楽しかった」「たくさんの人と交流できてよかった」といった声をいただき、私たちにとっても充実したイベントとなりました。

今回のイベントの一番の目的は、「日本人学生とスウェーデン人学生が楽しく交流しながら、お互いの文化を知ること」でした。その目的はしっかり達成できたのではないかと思います。これからも、文化交流を深められるようなイベントをたくさん企画していきますので、どうぞよろしくご期待いたします。

[報告者：上智大学 法学部 清水美桜]

『三遊亭好青年様×Sweäters ～伝統芸能の世界『落語』と北欧～』

2026年1月6日 オンライン開催

スウェーデン人落語家の三遊亭好青年様をゲストにお招きし、トークイベントを実施しました。三遊亭好青年様はスウェーデンのウプサラ市ご出身で、江戸落語界初のヨーロッパ出身落語家として、寄席や全国公演のみならず、司会やナレーション、講演、執筆活動など国内外で多岐にわたってご活躍されています。

本イベントの前半では、日常生活や国民性、教育に至るまで様々な観点からスウェーデンと日本の相違点について好青年様からお話しいただいた後に、日本留学を含む日本文化との出会いや落語の世界に入られた経緯に加え、伝統的な厳しい修行を乗り越えたご経験や日瑞における笑いのツボの違いについても赤裸々に語っていただきました。イベント後半では、参加者の方々とSweätersメンバーがグループに分かれてご講演に基づく意見交換をし、そこで出た感想や質問に対して好青年様よりコメントを頂きました。

日本支部のイベントでありながら、北欧ではなく日本の文化に焦点を当てるといった初めての試みでしたが、「スウェーデン人から見た日本の笑いや文化を知る」という当初の目的を無事に達成することができました。また、短い時間ではありましたが、Zoom上で参加者同士が交流する機会を設けることができ、ご好評をいただきました。

今回は好青年様のご厚意により学生無料とさせていただいたこともあり、多くの学生の方々にご参加いただくことができました。一方で、参加者の属性は「北欧にすでに興味のある方」とどまり、北欧文化という未だニッチな分野の裾野を広げることの難しさを痛感しました。イベント内容や集客方法を今一度見直すとともに、団体認知度の向上と北欧の魅力発信により一層尽力してまいります。

〔報告者：明治大学 国際日本学部 亀田篤樹〕



『“Bento” workshop ~Japanese lunch time』

2026年2月1日開催 @ウメオ大学

お弁当作り体験を通して日本の食文化を広めることを目的に、ワークショップを開催しました。スウェーデンをはじめとする様々な国出身の学生、日本人留学生を含め延べ25名の方に参加していただきました。本イベントはウメオ大学のStudent Unionとの共催という形で開催され、Unionの皆さまには場所の提供や宣伝等においてたくさんのご協力を賜りました。

イベントでは初めにスライドを使用して日本のお弁当文化について紹介しました。最近話題のお弁当に関するSNSの紹介等、学生ならではの視点で日本のお弁当文化の魅力を伝えました。その後、『おにぎり作り』と『お弁当詰め』の2つの体験を通して、実際にお弁当作りに取り組んでいただきました。まずは好きな具材を選んでおにぎりを握ってもらいました。参加者の皆さんが形を三角に整えるのに苦戦する様子が多く見られました。次のパートではビュッフェスタイルでおかずをお弁当箱に詰め、オリジナルのお弁当を作っていました。最後はお弁当を食べながらの交流会を行い、終始和気あいあいとした雰囲気の中で、イベントは無事に終了しました。参加者の方からは「様々な種類のお弁当についての紹介が面白かった」「またウメオでイベントを開催してほしい」といった声をいただき、本イベントが参加者にとって満足度の高いものとなったことがうかがえました。

今回はSweätersとして初めてウメオでイベントを開催しました。Student Unionの協力もあり、ウメオ大学の学生にSweätersの存在を知っていただく機会となり、団体として大きな一歩になったと考えています。今後も現地の学生の関心や反応を大切にしながら、学生ならではの視点で日本文化を紹介する活動に積極的に取り組んでいきたいと考えています。
[報告者：東京大学 経済学部 鎌田真由香]



『Japanese food Sittning』

2026年1月30日開催 @ルンド大学スモーランドネーション

シットニングとは、スウェーデンの大学のパーティーの伝統的なスタイルです。前菜、メインディッシュ、デザートと3品を提供し、合間にゲームや歌などを楽しむものです。今回の私たちのイベントは、日本食と、スウェーデンのシットニングを掛け合わせ、日本の食文化を広めることを目的に、イベントを開催しました。スウェーデン人学生、日本人学生、その他の国からの留学生を含め延べ47名の方に参加していただきました。本イベントの実現にあたり、場所の提供や宣伝等において、ルンド大学のスモーランドネーションのスタッフの方々にたくさんのご協力を賜りました。

イベントでは、前菜として味噌汁、メインディッシュとしてかけうどんと野菜の天ぷら、デザートとして大学芋を提供しました。間のゲームでは、難しい日本語と英語を用いた伝言ゲーム、日本の行事をテーマとしたすごろくを行いました。ランダムな座席設定にしましたが、参加者の方々が会話を楽しんでおり、温かい雰囲気イベントは無事に終了しました。参加者の方からは「日本食が美味しかった」「間のゲームも楽しかった」といった声をいただき、本イベントが日本らしさを感じていただけるきっかけになったと感じております。

ルンド大学には日本語学科があり、Sweättersに所属している日本人留学生の数も多いため、イベントを大きな規模で開催することができました。一方、今後は、日本にあまり興味がない方にもイベントに参加していただくことができるよう、広報を工夫する等、より試行錯誤しながら企画・運営を行ってまいります。

[報告者：早稲田大学 国際教養学部 田村陽菜乃]



『Japanese New Year』

1月上旬に、日本のお正月を体験できるイベントを開催しました。スウェーデン人を中心に様々な国籍の学生さんが延べ15名が参加してくださいました。会場は、ヨーテボリ大学とチャルマシュ大学の合同学生寮にある共有カフェを利用しました。スウェーデンのお正月とは異なり、日本のお正月には様々な伝統があります。本イベントでは、日本のお正月文化を体験していただくために、お餅と日本のお菓子の提供、羽付、書道を行いました。

お餅は、日本の定番の味（きなこ、砂糖醤油）に加え、スウェーデン風の味付け（キャビアペースト、クランベリージャム）も用意しました。特にきなこは大変人気があり、多くの方に好評でした。参加者の皆さんは、お餅の独特の硬さに少し苦戦しながらも、美味しそうに召し上がっていました。食事を楽しみながら、参加者同士が会話で盛り上がり、仲を深めることができ、とても良い雰囲気でした。今回は小規模のイベントだったため、運営メンバーも一人ひとりとじっくり交流を深めることができたと感じています。羽付では、最初は難しいのではないかと懸念していましたが、実際にはほとんどのペアが数回連続でラリーを続けることができ、良かったです。「バドミントンのようで、思ったより簡単だった」という声もあり、私たちにとっても嬉しい驚きとなりました。書道体験では、自分の名前にあてた漢字や、好きな漢字を書いていただきました。書道経験のあるメンバーがお手本を示しながら、丁寧に指導を行いました。初めて筆を持つ方が大半でしたが、皆さん美しい字を書くことができ、「またやりたい」という声も多くいただきました。

本イベントはヨーテボリで初めてのイベントとなりました。そのため、新しい人に向けて Sweaters の名前を広め、日本文化を伝えることが出来たと思います。今後も、参加者の皆様からいただいた声を参考にしながら、日本文化を体験してもらえ、イベントの運営に積極的に取り組んでいきたいです。

[報告者：早稲田大学 法学部 山内貴子]



これからも、日本と北欧、両方の魅力をより多くの方々に伝えていき、少しでもその距離を縮めることができるよう、メンバーの力を合わせて活動して参りますので、温かく見守っていただけたら幸いです。

3月以前開催のイベントやインタビューの動画につきましては、SweätersのInstagramアカウント (https://www.instagram.com/sweaters_jp/) にて事後報告を投稿しておりますので、ぜひそちらをご覧ください。

[報告者:明治大学 国際日本学部 佐藤啓青]

明治大学国際日本学部鈴木ゼミ活動報告①

2026年1月研究講座 第15期研究発表会

明治大学国際日本学部鈴木ゼミでは、2012年より毎年JISS研究講座の場で卒業発表を実施しており、今年で15回目を迎えました。今回は、以下の6名が発表を行いました。

戸田 万貴「スウェーデンから学ぶメディアリテラシー教育」

伊藤 羽奈「なぜ日本ではジェンダー平等が進まないのか—スウェーデンとの比較からの示唆」

田中 啓太「国民意識と制度が、スウェーデンの民間防衛参加と戦う意志に与える影響」

山本 健「日本とスウェーデンの国家ブランド戦略」

宍戸 愛「なぜスウェーデン人は自己肯定感が高いのか」

大関 渚「スウェーデンの移民政策-労働による移民統合について」

発表関連資料

- (1) 戸田 万貴「スウェーデンから学ぶメディアリテラシー教育」
発表スライド

スウェーデンから学ぶ メディアリテラシー教育

—日本が取り入れられる「教育の素材」—

戸田万貴

一 本研究の視点

- スウェーデンはメディアリテラシー教育の先進国とされているが、決して完璧なモデルではない
- 両国を比較し、日本が参考にできる「教育の素材」を整理する
- 日本の教育に導入可能な要素の抽出を目的とする

二 スウェーデンの教育体制と現状

- ▼ 2018年の教育カリキュラム改訂で「デジタル能力 (Digital Competence)」を全教科で育成すべき力として明記
- ▼ 小学校低学年から段階的に、SNS利用・情報評価・デジタルメディアの理解を学ぶ
- ▼ 情報の真偽判断や批判的思考を重視した探究・対話型の学習が中心
- ▼ 政府機関 (スウェーデン・メディア庁) が教材・教員研修を体系的に支援
- ▼ オンライン教材「MIL for me」を通じて全国的な教育の質を担保

三 MIL for me (MIK för mig)

MIK : medie- och informationskunnighet (瑞)
= MIL : media and information literacy (英)

メディア・情報リテラシー教育のオンライン学習リソース

- 情報を探し、入手する力
- 情報やメディア内容を分析・理解する力
- 情報の信頼性を批判的に評価する力
- 情報を表現・制作し、社会に参加する力

目的：
反民主主義的メッセージ、偽情報、インターネットの文脈において、若者(主に12-18歳)の情報処理能力と情報源評価スキルを強化すること。

提供元：
スウェーデンメディア庁
評価：
ヨーロッパでInsafeネットワーク最優秀賞を獲得するほど高く評価されている教材

大使館インタビュー

Q：学校でのメディアリテラシー教育はどう進む？

- 就学（6歳）以前から、子どもは幼少期よりデジタルに触れる
- 学年が上がるほど、情報源の選び方／信頼性判断に重点が移る
- SNSの登場で教育は難しくなったが、一部教育ツールとしても活用されている

Q：政府・制度の支援は？

- メディアリテラシーはカリキュラムの正式な一部
- 誤情報・偽情報の影響は避けられず、若者教育は重要課題
- 政府・メディアによるファクトチェック啓発が行われている

Q：家庭では？（副大使個人の例）

- 15歳の娘がTikTok依存気味でも、禁止ではなく情報源を問い対話する

→スウェーデンでは学校と家庭の両方で「情報源評価」が重視されていた

出典：副大使インタビュー（2025年）

日本の教育体制と現状

- ▼ 新学習指導要領（2020年度以降）で「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力に位置づけ
- ▼ GIGAスクール構想により、1人1台端末などICT環境は急速に整備
- ▼ 指導内容は情報モラルや安全管理が中心で、探究的な活用は限定的
- ▼ 教師研修や指導内容の体系化、家庭との連携には課題が残る
- ▼ ハード整備に比べ、ソフト面の運用が十分に追いついていない

出典：文部科学省・国立教育政策研究所
https://www.mext.go.jp/na/na/na/pdf/2022_01_point_3.pdf
https://www.jetro.go.jp/na/na/na/pdf/2022_11_0902/20750816182.html

エビデンスで見る日瑞の差

NRI (Network Readiness Index)

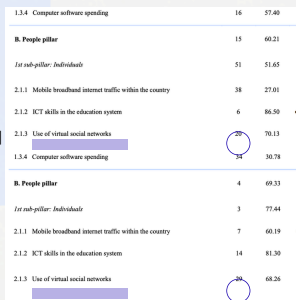
「各国がどの程度、ICTを社会・経済にうまく生かしているか」を総合的に評価する指数。

[スウェーデンと日本のNRI 2024の位置]

- スウェーデン：総合4位／133か国
- 日本：総合12位／133か国

[ICT skills in the education system]

- スウェーデン：世界6位
- 日本：世界14位



出典：
PISA2022: <https://www.oecd.org/pisa/data/pisa2022/>
PISA2022 Country Profiles: <https://www.oecd.org/pisa/data/pisa2022/country-profiles/>
PISA2022 Country Profiles: <https://www.oecd.org/pisa/data/pisa2022/country-profiles/>
PISA2022 Country Profiles: <https://www.oecd.org/pisa/data/pisa2022/country-profiles/>
PISA2022 Country Profiles: <https://www.oecd.org/pisa/data/pisa2022/country-profiles/>

PISA 2022

[ICTを用いた探究型の学習の頻度]

- 日本 → ICT活用調査に参加したOECD加盟国の中で最下位

[デジタル学習への準備度]

- スウェーデン：6位／70か国
- 日本：70位／70か国（最下位）

Teachers' engagement, motivation and drive

Sweden has one of the highest levels of preparedness for digital learning among OECD and partner countries/economies. (0.6 Ratio, rank 6/70, 2022)
Download Indicator

Teachers' engagement, motivation and drive

Japan has one of the lowest levels of preparedness for digital learning among OECD and partner countries/economies. (-0.79 Ratio, rank 70/70, 2022)
Download Indicator

一 家庭におけるSNS利用の違い

【スウェーデン】
対話→自律

親による一方的な
利用制限は「時代遅れ」
と考えられている

科学的根拠やデータを示し、
親子で話し合うことで子ども
の判断力を育てる

子ども自身がSNS利用を調
整・中断する選択を行うこと
が重視される

【日本】
管理→安心

小中学生の子を持つ
親の75%がスマホや
SNSの利用制限

安全確保を優先する一方、
自律的判断を育てる機会
は限られがち

出典：講演会「スウェーデン流 子どもの脳の育て方」
副大臣インタビュー（2025年）
THE TIMES
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000008.000144554.html>

二 スウェーデンと日本の比較

観点	スウェーデン	日本
位置づけ	全教科でデジタル能力	基盤能力として情報活用
教育実践	探究・批判的思考	情報モラル・安全指導
教師支援	教材・研修が体系化（MIL）	研修・制度化に課題
家庭・社会	対話で自律を促す	管理で安全を確保
課題	SNS依存・情報過多	活用不足のギャップ

三 比較から見た「日本が学べる素材」

1. 学校：探究学習の中に「情報源評価・真偽判断」を組み込む
2. 家庭：管理中心から「科学的根拠×対話」で自律を支える
3. 制度：教材・研修を専門機関が継続的に支援（MIL FOR ME型）
4. 共通：SNSを排除せず、教育ツールとして活用する発想

(2) 伊藤 羽奈「なぜ日本ではジェンダー平等が進まないのか—スウェーデンとの比較からの示唆」発表スライド

◀

なぜ日本ではジェンダー平等が進まないのか

スウェーデンとの比較からの示唆

▶

明治大学国際日本学部 伊藤羽奈

日本の現状

- 憲法24条：夫婦同権
- 男女雇用機会均等法
- 女性活躍推進法
- 男女共同参画社会基本法

- 育児休業制度（最大2年）→41か国中1位の制度（ユニセフ/2021）
- 産後/パパ育休：最大28日間取得可能
- 従業員1000名超の企業は育休取得状況を年に1回公表する義務

- ジェンダーギャップ指数（2024.6） 118位/146か国
C7中最下位

<https://www.unicef-irc.org/publications/pdf/where-do-rich-countries-stand-on-childcare.pdf>

問い

なぜ日本は制度が整いつつあるのに、男女平等だと感じづらいのか？
制度を作るだけでは変えることのできない深い原因があるのではないか？
→男女平等が進んでいるスウェーデンと比較し、日本の課題を探る

仮説

日本の男女平等は 特定の法制度だけでは進まない



調査方法

インタビュー

スウェーデン大使館
ヨハンナ公使

(元) 立憲民主党
馬場雄基議員

書籍

なぜ男女格差はなくな
らないのか
(田中世紀・2025)

無理しすぎないスウェ
ーデン人
(佐藤吉宗・2025)

講演会

スウェーデン流
夢を描ける子どもの脳
の描き方

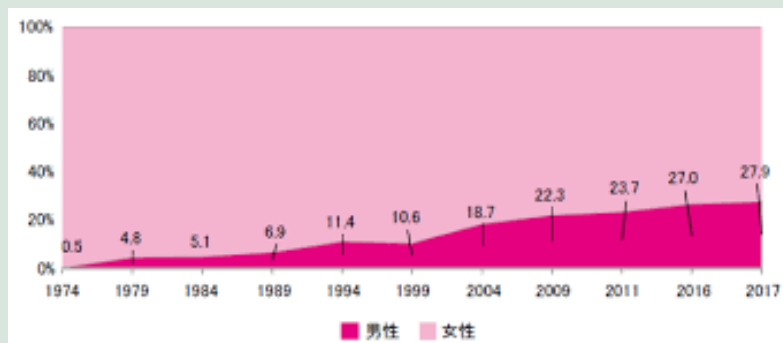
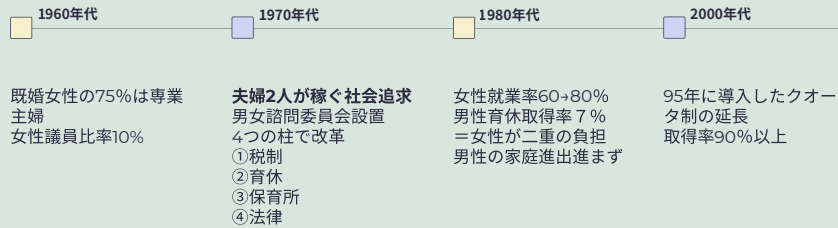
成田奈緒子さん
久山葉子さん

日本の課題① 育休制度

	日本 「女性の就業継続」	スウェーデン 「男女平等の育児参加」
期間	産休：98日（産前6週間・産後8週間） 育休：原則子供が1歳に達するまで（最長2年）	480日（16か月）
所得保障	180日間：収入の67% 以降：収入の50%	390日間：収入の80% 90日間：SEK180/日（約3000円）
男性取得率	40.5% そのうち4割が2週間未満・5割が2ヶ月未満 https://kamen-project.mhlw.go.jp/assets/pdf/event/report_RS_2.pdf	約90% 最低90日間は父親が取得：パバクオータ制 取得しない場合母親に譲渡不可

スウェーデンの変化

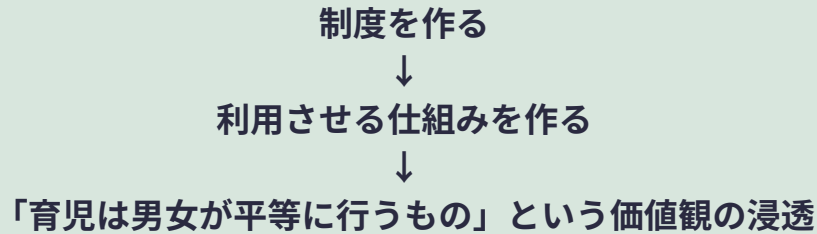
スウェーデンが変わったのはここ30年！



独立行政法人労働政策研究・研修機構

2022年には30.9%（約160日間）、取得率自体は90%以上

スウェーデンの変化



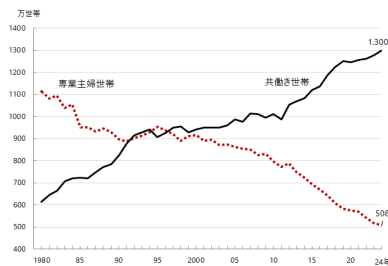
育児に対する価値観	男性が育児参加するメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアへの悪影響無し ・育休を取らせない会社に人が残らない ・「一時的育児休業給付」を取得可能 (子供1人あたり120日/年) ・男女どちらもいることがいい職場を作る ・父親も子供が理由の欠勤をしている →採用時に女性だけ不利になることはない →誰が休んでもお互い様、別の人が引き継げる体制 	<ul style="list-style-type: none"> ・夫婦の子育ての姿が子供にとって「男女平等のロールモデル」 ・多様な価値観の育成 ・子供の学力や社会的スキル向上、問題行動減少 ・愛情が2倍→自己肯定感の向上 ・母親のストレス軽減、仕事への満足感からストレス減少→家族全体の幸福感 ・後からは得られない子供との絆

日本の課題②税制度

日本の課税単位＝世帯
 配偶者控除が女性を「第2の稼ぎ手」としているのではないか

税制度について

- ・1947年：個人単位課税を原則として所得税が確立（土台）
- ・1961年：配偶者控除導入
男性稼ぎ手モデル、専業主婦+子供を標準として設計された政策
- ・1992年：共働き世帯が専業主婦世帯を上回る
→税制度が家族モデルの変化に適應していない



問題点

- ・経済的不平等
- ・女性の就業調整、労働意欲低下
- ・新しい家族像に不適合

日本の課題③働き方

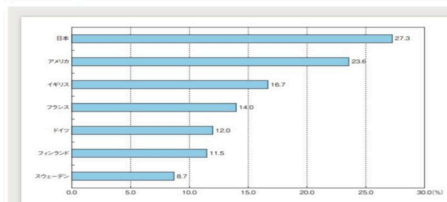
スウェーデン

残業は年間200時間・月に50時間まで
残業した場合：別の日に休む・早く帰る

日本

残業は月45時間・年間360時間
平均20時間/週

第1-1-26図 男性就業者の長時間労働の割合（国際比較）



資料：労働政策研究・研修機構「データブック国際労働比較2019」（2019年）
注：1. ここでいう長時間とは、ILOSTATの労働時間別就業者統計において、本表掲載国に共通する最長の区分である週44時間以上を指す。原則、企業業、就業者（パートタイムを含む）が対象。
2. いずれの国も2018年のデータである。
3. アメリカは16歳以上が対象。
4. 韓国は、フランス、ドイツ、フィンランド、スウェーデンは、フルタイム及びパートタイム労働者が対象。

問題点

- ・男性が育児を取得しづらい
- ・女性が管理職になりづらい

日本の課題④政治

女性が議員になりづらい理由

- ①金銭的理由
- ②活動時間の長さ
- ③セクシャルハラスメント・差別

馬場議員

「議員は365日出動できる状態を作るべき」

高市総理

「WLBを捨てる。働いて働いて働いて働く。」

ヨハンナさん

「議員であってもWLBを尊重するのは当然」



問題点

- ・固定概念形成、再生産
- ・政策決定の偏り、遅延
- ・ジェンダー平等推進の阻害

結論

日本のジェンダー格差は個別制度の欠陥ではなく、
家族を前提にした制度体系が共働き社会に移行できていないことに起因する。

日本は今後どう変わるか

女性の社会進出だけでなく男性の家庭進出を

- ・育休の目的「女性の就業継続」→「男女平等な育児参加」
- ・ババクオータ制導入、給付率改善
- ・長時間労働改善
- ・管理職の意識改革
- ・税制度、社会保険の個人単位化

手の届く範囲で行動する

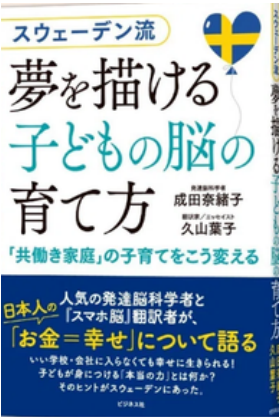
- ・政治にも職場にも変化を求める
- ・男性が休みを取れないなら女性の負担を減らすことで平等に
- ・子供に性別役割を教えない
- ・育休や時短勤務を特別な選択と考えない
- ・当事者意識を持つ
- 「男女の格差は個人の不利益につながる」



明治大学国際日本学部鈴木ゼミ活動報告②

『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』講演会を通して

本を紹介



『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』

ベストセラー『スマホ脳』の翻訳者であり、実際にスウェーデンで子育てを経験されている久山葉子様と、発達脳科学者であり、日本の子育て親子に寄り添ってこられた、成田奈緒子様が、共働き家庭の子育てについて語ります。スウェーデンでの子育て経験を通じた価値観や、実際の脳科学の視点を取り入れ、「いい学校→いい会社=お金を稼ぐ」という日本の子育ての従来の価値観とは違う考え方を見出すことができます。

同調圧力の強い社会の中で、小さいころから様々な習い事、受験を経験し、負荷を感じている子どもたちや、思い通りにいかず悩んでいる親。今の日本の親子、社会は疲れ切っている雰囲気もあります。お金や学校、会社に縛られずに、個人の幸せのために夢を描けるようになるには、どのような考え方や変化が必要でしょうか。今絶賛子育て中の方でも、そうでない方でも、今までと違う尺度で考えることができる、おすすめの一冊です。

『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方 「共働き家族」の子育てをこう変える』
著者 成田奈緒子 久山葉子

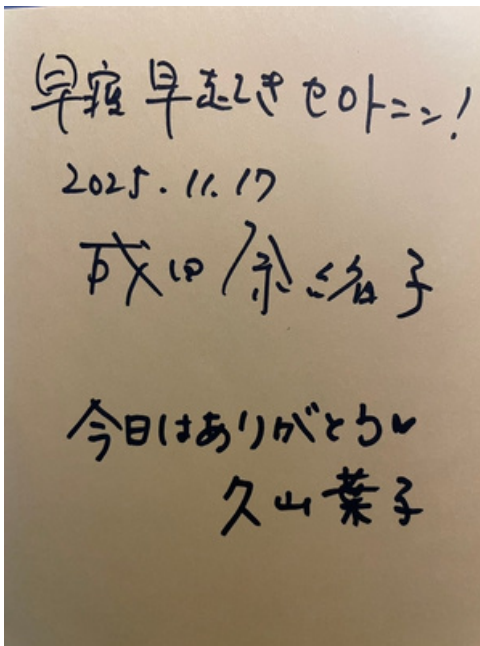
活動報告

講演会について

一般社団法人スウェーデン社会研究所の11月研究講座において、11月17日にお二方の著書である『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』をテーマに講演会を開催しました。

講演会の開催にあたっては10月、12月にゼミ内で中間発表を行いました。10月の発表では本の内容や講演会で行う質問と仮説を、12月の発表では講演会でいただいた回答をそれぞれまとめました。

講演会当日は、トークセッション形式で進行し、スウェーデンにおける子育てや教育に関する考え方について、具体的な事例を交えながらお話しいただきました。終盤には質疑応答の時間を設け、参加者との間で活発な意見交換が行われました。ご多忙の中ご参加いただき、誠にありがとうございました。本講演会は、スウェーデンにおける子育てや教育への理解を深める有意義な機会となりました。



本記事の目的

読んでいただくにあたって

本の内容と講演会を通して、「日本の子どもたちが本当に幸せに生きていく」ために、スウェーデンから取り入れられることはあるか、今の日本の現状やこれからどう変化をするべきなのか、スウェーデンの切り口から考え、ゼミ生5人が記事を執筆しました。最終的に、日本の将来の親子が、夢を描けるようになるにはどうすればいいかを考えます。今子育て中の人でもそうでない方も、この記事を読んでくれる皆様が自分の幸せの考え方や生き方を違う角度からみるきっかけになればと思っております！



子どもの未来を育てる、親の言葉と関わり方

『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』の講演会を通して、親の子どもに対する日々の接し方が、子どもの考え方や自己肯定感、そして将来の考え方までに大きな影響を与えることを学びました。子育ては特別な教育や才能が必要なのではなく、日常の声かけや関わり方の積み重ねが、子どもの脳と心を育てていくのだと感じました。講演の中では、スウェーデンの子育てにおける考え方や、子どもが自分らしく成長するための環境づくりについて、具体的な例を交えながらお話していただきました。特に印象に残ったのが、成田様の「子どもをほめるのではなく、認めることが大切」というお話でした。一見すると似ているように思える「ほめる」と「認める」という行為の違いは、子どもの内面に与える影響において大きく異なることを知り、親子の関わり方について改めて考えさせられました。



本記事では、認めるという関わり方が、なぜ子どもの成長にとって重要なのかについて考えていきます。

日本の子どもを取り巻く現状 自分を他者と比べてしまう子どもや若者たち

日本の子どもを取り巻く現状として、自尊感情や自己有用感、自己肯定感の低さがあります。こども家庭庁が実施した令和5年度「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査」によると、「私は、自分自身に満足している」という問いに対して「そう思う」と答えた日本の子ども・若者の割合は16.9%にとどまり、アメリカ・ドイツ・フランス・スウェーデンと比較して最も低い結果です。また「自分には長所があると感じている」という問いに対して「そう思う」と答えた日本の子ども・若者の割合は21.1%、「今の自分が好きだ」という問いに対して「そう思う」と答えた日本の子ども・若者の割合は17.5%であり、いずれも他国と比べて著しく低い水準です。この結果から、日本の子ども・若者は、自己肯定感や自尊感情を十分に育てているとは言い難い状況にあることが分かります。

さらに、同調査では、日本の若者の特徴として、「自分は役に立つかどうか」という自己有用感が、自分自身への満足感、すなわち自尊感情と強く結びついていることが示されています。これは、日本の子どもや若者が自分自身の内側からではなく、「他者にとって役に立っているかどうか」という対他的な基準で判断しやすい傾向にあることを意味しています。そのため、誰かの期待に応えられなかったと感じたときや、成果を出せなかったときに、自分自身の存在価値まで否定してしまう危険性をはらんでいるといえます。

学力水準が高く、物質的にも比較的恵まれた環境にあるにもかかわらず、「自分に自信が持てない」「自分に満足できない」「今の自分が好きではない」と感じる子どもや若者が多いという現実には、日本社会における子育てや教育の在り方に何らかの要因があるとも考えられます。特に、子どもをどのような視点で見つめ、どのような言葉をかけてきたのかという、大人の関わり方は無視できない要素だと考えます。

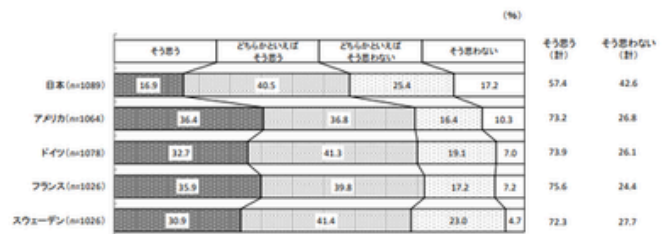
こうした現状と深く関連していると考えられるのが、「ほめる」という関わり方の難しさです。子どもを励ますつもりでかけた言葉が、結果として「役に立つ自分」「期待に応える自分」でなければ価値がないというメッセージとして受け取られてしまう可能性がある点について、改めて考える必要があります。

「ほめる」という関わり方の難しさ 子どもを「ほめる」のではなく「認める」

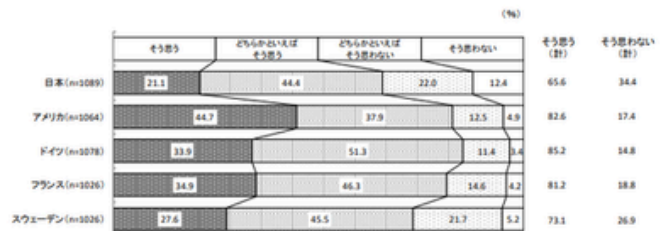
子どもをほめることは良いことのように思えますが、講演会では成田様は「ほめる」という行為には大人の価値観が入りやすいという問題点を指摘されていました。例えば、「すごいね」「えらいね」といった言葉は、親にとって都合のよい行動や、親の理想像に合致した結果を評価しているにすぎない場合が多いです。また、関水（2018）は、他者との比較によるほめる行為は「優劣を明らかにされるため緊張や不安を煽る」（p.197）と指摘しています。このような結果、子どもは「ほめられる理想の自分」と「うまくできない自分」を無意識のうちに比べるようになり、できなかったときに自分を否定してしまうのです。つまり、評価としてほめ言葉は動機づけになる一方で、自己肯定感を下げてしまう危険性も併せ持っています。

では、「認める」とはどのような関わり方なのでしょうか。講演会で成田様からお話いただいた「認める」とは、良い行動か悪い行動かに関わらず、「その子がそうした」という事実そのものを受け止める姿勢です。成功したときだけでなく、失敗したとき、不登校になったとき、思うように行動できないときも、「そういう一面があるんだね」とその子の存在そのものを肯定することが大切だということです。できる・できないという結果で子どもを切り分けてしまうのではなく、すべてをその子の一部として尊重することが、子どものためなのではないでしょうか。

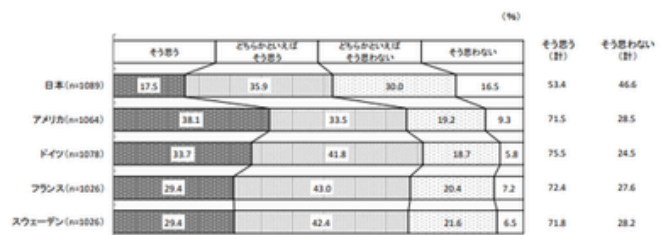
(a) 私は、自分自身に満足している



(b) 自分には長所があると感じている



(c) 今の自分が好きだ





安心して「自分」でいられる場所を、子どもたちへ

執筆：南川あずさ（明治大学国際日本学部）

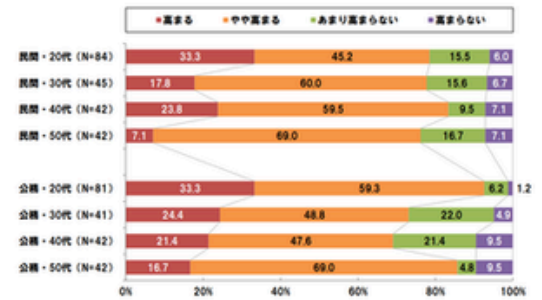
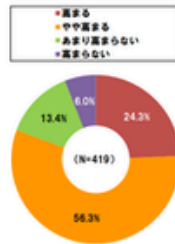
スウェーデンの子育て観 子どもを一人の人格として尊重する

この「認める」という考え方は、スウェーデンにおける子育て観にも深く結びついているのではないのでしょうか。スウェーデンでは、子どもを「将来成功するために育てる存在」ではなく、「今を生きる一人の人格」として尊重する文化が根付いていると感じます。結果や成績よりも、子どもが何を感じ、何に興味を持っているのかという内面に関心を向けることで、子どもは安心して挑戦し、失敗することができます。そのような環境の中でこそ、自分なりの夢を描き、それに向かって進もうとする力が育つと考えます。

大人側に求められる視点と心の準備 大人が手放すべき評価軸

子どもを「ほめる」のではなく「認める」関わり方を実践するためには、子ども側の変化だけでなく、大人側の視点や心のあり方を変える必要があるのではないのでしょうか。多くの大人は無意識のうちに、「何ができたか」「どれだけ成果を出したか」という基準で子どもを見てしまいがちです。それは、大人自身が日常的に評価され、結果を求められる社会の中で生きていくこととも深く関係していると考えられます。実際に、株式会社サーベイリサーチセンターが実施した「職場における「ほめる効果」に関するアンケート（2014）」によると、「ほめられるとやる気が高まる」という問いに対して、「高まる」「やや高まる」と回答した人は約8割にのぼり、特に20代公務では92.6%と高い結果が示されています。

<ほめられるとやる気が高まるか>



職場における「ほめる効果」に関するアンケート2014
株式会社サーベイリサーチセンター
日本全国の20～59歳の男女個人
665サンプル（管理職＋一般社員/職員）

この結果からも分かるように、大人自身が「ほめられること」を動機づけとして働いているため、その延長として、子どもに対しても無意識に「ほめる」関わり方をしてしまうのではないのでしょうか。

しかし、「認める」関わり方を実践するためには、こうした評価軸そのものを一度手放すことが、「認める」関わり方の第一歩となると考えます。

「認める」関わり方をするために大人に求められるのは、正解を教えることや、すぐに解決策を示すことではないと思います。むしろ、子どもの言動を通して、その背後にある感情や思いに目を向ける姿勢だと考えます。子どもが失敗したときや問題行動を起こしたときほど、「なぜそうしたのか」「何を感じていたのか」に関心を向けることが求められます。これは、子どもを甘やかすこととは異なり、子どもを一人の人格として尊重する態度だと考えます。

また、「認める」関わりは、子どものためだけのものではなく、大人自身の心のあり方とも深く関係しています。大人が自分自身を結果や役割で評価している場合、同じ基準を無意識に子どもにも当てはめてしまうことが多いです。そのため、子どもを認めるには、大人自身も「できる自分」「役に立つ自分」だけでなく、できない自分や迷っている自分を受け入れる必要があります。大人が自分を厳しく評価しすぎない姿勢をもつことが、結果として子どもにとっての安心できる環境につながるのではないのでしょうか。

子どもが「自分でいい」と思える社会へ 「ほめる」よりも「認める」関わり方の可能性

今後の日本における子育て観は、「成果を出せる子どもを育てる」という発想から、「存在そのものが尊重される子どもを育てる」という方向へ転換していく必要があるのではないのでしょうか。少子化が進み、一人ひとりの子どもに向き合う重要性が高まる中で、従来のように能力や結果を基準とした評価中心の関わり方だけでは、子どもの内面の成長を十分に支えることは難しいと感じます。

「ほめる」ことが必ずしも悪いわけではないですが、それが評価や期待と結びついたとき、子どもは「ほめられるための自分」を演じるようになり、自分の本音や弱さを出しにくくなる可能性があります。一方で、「認める」という関わりは、子どもにとって「できなくてもいい」「失敗しても自分の価値は変わらない」という安心感を与えます。この安心感こそが、挑戦する力や自分なりの夢を描く力の土台になると考えます。

スウェーデンの子育て観にみられるように、子どもを一人の独立した存在として尊重し、その内面に耳を傾ける姿勢は、日本においても今後ますます求められると考えます。そのためには、親や大人自身が「評価する側」であり続けるのではなく、子どもとともに成長していく存在として、自らの価値観や関わり方を問い直す必要があります。

子どもを変えようとする前に、大人のまなざしを変えること。結果よりも過程に。行動よりもその背景に目を向けること。その積み重ねが、子どもが自分を肯定し、自分の人生を主体的に歩んでいける社会につながるのではないのでしょうか。今後の日本の子育てには、「ほめる」から「認める」へと軸を移す発想の転換が求められると考えます。

そして、今回の講演会および準備段階で得た学びを、将来自分自身が子どもと関わる当事者となった際の姿勢や関わり方に生かしていきたいと考えます。

参考文献

- 株式会社サーベイリサーチセンター (2014) 「職場における「ほめる効果」に関するアンケート」
https://www.surece.co.jp/wp_surece/wp-content/uploads/2017/12/004_02.pdf
- こども家庭庁 長官官房参事官（総合政策担当）(2023) 「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」調査実施機関：株式会社インテージリサーチ
- 関水しのぶ (2018) 「子どもを「ほめること」を考えるー学習動機づけや自律性を高めるためにー」『神奈川大学心理・教育研究論集』第44号, pp. 197-202.



頑張りすぎない子育てへ

スウェーデンに学ぶ「親が休む」「手を離す」という考え方

執筆：能川里奈（明治大学国際日本学部）

スウェーデンから探る、新しい子育ての視点

『スウェーデン流 夢を描ける子供の脳の育て方』と講演会を通して、スウェーデンの親は子どもが生まれても環境を柔軟に選びながら、自分の時間も適度に大切にしつつ子育てをしていることを学びました。

一方で日本では、子育て中の親が「子どものことを最優先に考えなければ」と自分を後回しにし、気づけば心にも時間にも余裕がなくなってしまうケースが多くあると言います。

実際に、内閣府の国際調査における「自国はこどもを生み育てやすい国だと思うか」という問いに対する回答には、両国間で大きな差がみられます。（そう思うと答えた割合はスウェーデンが97.1%、日本は38.3%）

そんな子育てしやすい国として知られるスウェーデンから、日本の私たちが取り入れられる視点はないのでしょうか。制度や社会の仕組みの違いは確かに大きく、簡単に取り入れられるものではありません。ただ、スウェーデンが福祉国家だからこそ親がのびのびとできるという話で終わらせてしまうのは少しもったいない気がします。

本記事では社会構造の問題はいったん脇に置き、今の日本社会の中でも、親一人ひとりが意識を変えることで実践できる考え方に目を向けていきます。子育てが苦しくなる原因は、制度以前に「親子の関係をどう捉えているか」にあるのではないのでしょうか。スウェーデンとの比較から“親が休むこと・手を離すこと”の意味を再定義し、日本の子どもたちがより幸せに生きていくためのヒントを探っていきたいと思います。



社会規範と親子関係

「普通」から外れることへの不安

日本人の親が自分の時間を持たない一つの要因として、「見えにくいタイト文化」の影響があると考えます。文化心理学者のGelfandら(2011)によると、規範への逸脱行動に厳しい「タイト」国家と、寛容な「ルーズ」国家が存在しています。この違いは、国民の価値観調査における回答のばらつきによって測定され、回答が均一であるほど強い規範が共有されている社会であるとされています。

これをもとに調査対象を68か国に広げたUz(2014)の研究によると、スウェーデンは最もルーズな国に分類されるのに対し、日本は比較的タイト寄りの国とされ、両国の数値には二倍以上の差が見られています。

(右図参照)

こうした研究結果を踏まえると、日本は表面的には自由なもの、「空気を読む」「普通から外れない」という曖昧な期待が強い文化であると考えられます。そのため、世間的な常識から外れると居心地が悪くなりやすいという意味で「見えにくいタイト」という言葉で表現しました。

一方のスウェーデンは、社会的規範からの逸脱が日本ほど問題視されることはなく、個性や一つの選択と捉えられることが多いといえます。

親子関係にあてはめて考えると、日本では「社会的に正解とされる道」から子どもが外れてしまわないよう、親が守ろうとする意識が働きやすいのではないのでしょうか。こうした姿勢は、講演会で成田さんが指摘していた、「子どもが理想通りにいかないことで失望感が高まり、頑張り方が空回りしてしまう」という話とも重なります。こうしたことから、日本では「一緒に背負う愛情」の形が生まれやすいのかもしれませんが。

一方スウェーデンでは、久山さんの話の中でも印象的だったように「失敗してもいくらでもやり直せる」という社会的な前提があります。そのため、親は子どもの手を離し、判断を委ねることができます。結果として、子どもの「自立を支える伴走者としての愛情」の形に落ち着きやすいのではないのでしょうか。

以上のことから、社会的規範の強さとそこからの逸脱(=失敗)に対する捉え方が「子どもの手を離すこと、親が自分の時間を取ること」の抵抗感に影響しているように感じられます。

▼CTL_Cが高い(ルーズ)国ランキング

* CTL_C(Cultural Tightness-Looseness, Combination) は社会のルールの強さと、そこから外れた行動への許容度を総合的に示した指標。

順位	国	CTL_C
1	ベルギー	119.8
2	ルクセンブルク	113.9
3	フランス	99.6
4	イギリス	89.3
5	スウェーデン	87.9
...		
32	日本	43.3
...		
50	バングラデシュ	6.6
51	ヨルダン	5.1
52	エジプト	3.9
53	インドネシア	3.1
54	モロッコ	0

順位は68か国中 (n/a除外)。中位の国は省略。



頑張りすぎない子育てへ

スウェーデンに学ぶ「親が休む」「手を離す」という考え方

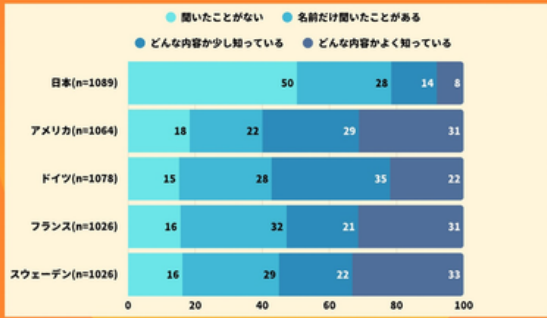
執筆：能川里奈（明治大学国際日本学部）

権利意識と親子関係 親子の境界線をどう引くか

前段落でも述べたように、日本では親が子どもの人生を自分のもの同様に背負い、「一緒に頑張る」ことが評価されやすい傾向にあります。親子が一体化した関係性の中では、子どもの手を離すことは冷たさや無責任さと結びつきやすく、その結果、親は自分のことを犠牲にしてでも子どものためを考えて動くようになります。

しかし一方で、こうした親の行動が、子ども自身が悩み、失敗し、それを自分の力で乗り越えていく経験を奪ってしまう可能性を含んでいるという視点は、まだ十分に共有されていません。この点が見過ごされることで、親の負担も子どもの生きづらさも気づかないうちに深刻化してしまいます。

あなたは、こどもには「自分に関係することについて、意見や気持ちを聞いてもらえる権利」（意見表明権）があることを知っていますか？



出典：こども家庭庁（令和5年度）
「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査」
長官官房参事官（総合政策担当）
調査実施機関：株式会社インテージリサーチ

対照的に、スウェーデンでは親子関係の価値観そのものが異なります。『スウェーデン流 夢を描ける子供の脳の育て方』の中で久山さんは、「スウェーデンでは就学前学校の段階から、子どもに“人間としての価値を尊重される存在である”という考えを伝えている」と紹介しています。子どもを子供扱いするのではなく、一人の人間として向き合うことが、ごく自然な文化として根付いているのです。

また、Olivariら（2015）の研究でも、スウェーデンの親は「子どもが自分の意見を表現する権利」を重視し、子どもを権利と可能性を持つ個人として捉えていることが示されています。さらに、過去50年間で権威主義的な子育ては大きく減少し、家庭内の関係はより平等なものへと移行してきたと指摘されています。こうした子どもの権利を前提とした価値観の共有が、親子の適切な距離感を保ち、関係性の健全化につながっていると考えられます。

一方、日本の現状を見ると、「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」において、「こどもには自分に関係することについて意見を聞いてもらえる権利（意見表明権）があることを知っているか」という問いに対し、日本では「知っている」と答えた割合が2割程度にとどまっています。スウェーデンを含む諸外国では半数以上が認知していることと比べると、日本では子どもを一人の主体として捉える視点や、子どもの意思を尊重するという考え方が、社会全体で十分に共有されていないことがうかがえます。

このような環境の中では、親と子の境界線はあいまいになりやすく、親は子どもの人生を自分の責任として抱え込み続けることになります。その結果、子どもの手を離すことがますます難しくなり、親自身も休むことや自分をいたわることに強い抵抗を感じるようになってしまうのです。

「手を離す」「休む」を、愛情として捉え直す

日本の親が自分をいたわる時間を持ちにくい背景には、社会的規範の強さと、親子の境界線があいまいになりやすい関係性が重なっていると考えられます。日本社会は制度や文化の面ですぐに大きく変えられるものではありませんが、子どもや親自身をどのように捉えるかといった内面的な意識は、視野を広げることで少しずつ変えていくことができるのではないのでしょうか。

スウェーデンの事例のように、日本とは異なる価値観が存在することを知らなくても、子育てに行き詰まった際の支えになる可能性があります。講演会や追加研究を通して私が特に強調したいのは、親がときに子どもの手を離し自分自身も休むことは、子どもの力を信じて委ねる一つの愛情の形であり、決して愛情に欠けた行為ではないという点です。また、子どもの失敗や親の理想から外れた行動を受け入れることは、親がすべてを背負い込まない選択であると同時に、子どもを一人の人間として尊重する姿勢でもあります。社会的規範や制度の制約がある中でも、親子関係の捉え方を見直すことは可能です。親がすべてを背負い込まない子育てのあり方を模索することが、日本における親の生きづらさを和らげ、より持続可能な親子関係につながっていくのではないのでしょうか。



参考文献

- Gelfand, M. J., Raver, J. L., Nishii, L. H., Leslie, L. M., Lun, J., Lim, B. C., et al. (2011). Differences between tight and loose cultures: A 33-nation study. *Science*, 332(6033), 1100–1104.
- Olivari, M. G., Hertfelt Wahn, E., Maridaki-Kassotaki, K., Antonopoulou, K., & Confalonieri, E. (2015). Adolescent perceptions of parenting styles in Sweden, Italy and Greece: An exploratory study. *Europe's Journal of Psychology*, 11(2), 244–258.
- Uz, I. (2014). The Index of Cultural Tightness and Looseness among 68 Countries. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 46(3), 319–335
- こども家庭庁 長官官房参事官（総合政策担当），2023，「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」（調査実施：株式会社インテージリサーチ）
- 内閣府，2023，「子育てに関する当事者の意識・声」『令和2年度少子化社会に関する国際意識調査 別添5』
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_seisaku_yushiki/pdf/230328_betten5.pdf





親子それぞれが自分らしく生きるために

執筆：長山倫子（明治大学国際日本学部）

「幸せ」な人生のルートとは？

「お金 = 幸せ」なのか？



今回、『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』講演会を通して、親子それぞれが自分の人生を自分らしく生きる事ができる環境がスウェーデンにはあるということを感じました。一方で、日本では自分の人生を自分の選択で進めていく感覚がスウェーデンよりも薄いように感じます。日本では、いい学校、いい会社に入り、安定した収入を得ることが模範的な幸せな人生のルートという価値観が浸透しています。そのため、親は子どもをその「幸せのルート」に乗せようとするあまり、無意識のうちに過干渉な子育てになってしまう傾向があります。

しかし、そのような生き方は、本当に親子双方にとって幸せだと言えるのでしょうか。

本記事では、講演会で語られたスウェーデンの人権意識や教育のあり方に注目しながら、日本社会において、親も子どももそれぞれより自分らしく生きるためのヒントを探っていきます。

日本の教育環境の現状

過干渉な子育てはなぜ生まれるのか

『スウェーデン流 夢を描ける子供の脳の育て方』p50において、成田様は、「日本では『お金 = 幸せ』という価値観から『いい会社 = いい職業』という最終的なゴールのイメージを描く親が多い」と指摘されています。そのゴールを目指すに到達するためには、良い職業に就くためにはいい高校に入り、いい大学に入ることが求められています。そのため、親は子どもが幼いうちから、進学塾等に通わせ、多くの費用を教育につぎ込むことになるでしょう。実際に、明光ネットワークジャパンが小学生・中学生・高校生の子供を持つ保護者900人を対象に実施した「教育費用に関する実態調査2025」では6割以上の家庭が教育費が負担が大きいと回答しています。また、教育費を「削りにくい」と回答した保護者は8割以上に上ります。このように、教育費に負担を感じながらもそれを削ることができない背景には、教育への投資が子どもの将来の幸せや安定につながるという強い信念があるからではないでしょうか。費用をかけているからこそ、親は子どもの選択や進路に強く関わり、結果として過干渉な子育てへとつながっていきます。自分の子供が幸せになるための模範的なルートから外れてしまったら、子どもの人生は失敗なのではないかという不安が親自身へのプレッシャーとなっています。

親に敷かれた幸せのための規範のルートは、本当に子どもを幸せにするのでしょうか。幼少期から成績を重視される環境に置かれた子どもたちは、親の期待に応えるために競争社会のプレッシャーに耐えなくてはなりません。子どもは、親の価値観に従って幸せな人生のためのルートをたどりながら、いい学校、いい会社を目指していくことになります。しかし、それは子どもたち自身が、「自分は何をしたいのか」「自分にとって何が幸せなのか」を考え、主体的な選択する機会を奪っている可能性もあります。

このように、子どもに幸せな人生を歩んでほしいという親の思いを出発点に、子どもを「お金 = 幸せ」という価値観に基づいた模範的なルートを歩ませるための投資が、結果として過干渉な子育てにつながってしまっているのではないのでしょうか。

社会が子育てに与える影響

「お金 = 幸せ」の価値観はどこから来たのか

自分の子どもに幸せな人生を歩んでほしいと願うこと自体は、親として自然な感情だと言えるでしょう。問題は、その「幸せ」が、いい仕事に就き、高い収入を得ることと強く結びついた価値観に囚われている点にあると考えます。では、そもそも「お金 = 幸せ」という価値観は、どこから生まれているのでしょうか。

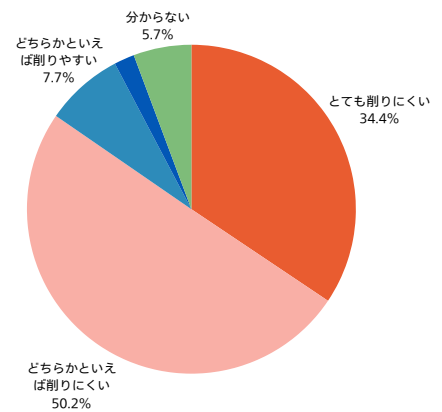
それは、日本社会に根強く残る差別や偏見、そして人権意識のあり方と深く関係していると考えます。

『スウェーデン流 夢を描ける子供の脳の育て方』の中で成田氏は、日本社会には無意識の差別や偏見が根強く残っていると指摘しています。例えば、弱者救済の考え方において、日本では「弱者はかわいそうだから支援する」という発想が中心になりやすいと述べられています。「かわいそうだから支援する」という発想は、一見問題ないように見えます。しかしそれは、相手を対等な存在として尊重しているのでしょうか。成田様はこの点について、「かわいそう」という言葉の裏には、差別や偏見が存在しているとし、日本は弱者を本当の意味で守れていない可能性があるとして指摘しています。

このような社会構造は、子育てにも大きな影響を与えているのではないのでしょうか。自分の子どもが「かわいそう」な立場に置かれられないようにするためには、政府に頼ることができないと感じ、親は自分自身や子どもは自分で守らなければならないという意識を強めていくのです。それは、自身の収入によって、人生における安全や安定を確保しなければならないという「お金 = 幸せ」の価値観を生みだします。そして、このゴールに到達できるルートこそ、まるで唯一の正解の生き方であるかのように捉えられていきます。

また、お金を稼げる人生こそが安全で幸せな人生であるという考え方は親から子どもへと無意識のうちに伝えられていきます。「お金 = 幸せ」という価値観は個人の意識の問題ではなく、日本社会に残る差別や偏見、そして人権意識の低さと深く結びついた社会全体の問題であると考えられます。

物価高でも教育費は削りにくいのか？





親子それぞれが自分らしく生きるために

執筆：長山倫子（明治大学国際日本学部）

スウェーデンから学べること

人権教育から価値観を変える

このように「お金＝幸せ」という価値観が根強く残る日本社会において、子どもたちが自分の夢を描き、自分らしく生きていくためには、何が必要なのでしょうか。講演会でのお話を通して、私はその鍵の一つが人権教育にあるのではないかと考えるようになりました。

日本では、子ども自身が持つ権利についての認識が、他国と比べて著しく低い傾向にあります。こども家庭庁が実施した令和5年度「我が国と諸外国の子どもと若者の意識に関する調査」によると、「あなたは、子どもには『自分に関係することについて、意見や気持ちを聞いてもらえる権利』（意見表明権）があることを知っていますか」という問いに対して「聞いたことがない」と答えた日本の子ども・若者の割合は50.3%に上ります。アメリカ・ドイツ・フランス・スウェーデンと比較して圧倒的に高い結果です。この結果から、日本社会において、子ども自身が自らの権利について十分に理解する機会が限られている現状があると言えるでしょう。

一方、スウェーデンでは幼い頃から人権教育が行われており、子どもは「私たちは全員同じ価値がある」ということを教えられます。そのため、子どもは幼くとも「子どもの権利」を意識し、主張することができます。また、人としての価値を尊重し、尊重されることを学ぶことで、差別や偏見は許されない社会であるという感覚も身につけていきます。

このような人権教育は、子どもに限らず、親にも大きな影響を与えています。スウェーデンでは、親は子どもをひとりの人間として尊重し、子どもの考えや選択を重視する姿勢を持っています。

そのため、スウェーデンにおいて、子どもは親に管理される存在ではなく、自分の人生を主体的に選び取ることができる親子関係と社会環境の中で成長していくことができます。

講演会で特に印象的だったのが、日本では子どもを「かわいい」を求めているという成田様の指摘でした。この「かわいい」とは、子どもが親の思い通りに行動してくれるか、つまりは模範的な人生ルートを歩んでくれそうかどうか、という評価が含まれています。成田氏によれば、自分の思い描いていた「かわいい」像から子どもが外れてしまったとき、「こんな子は自分の子ではない」「こんなはずではなかった」と強い挫折感を抱く親も少なくないといいます。

本来、子どもは「かわいいかどうか」で評価される存在ではありません。日本の子どもたちは一人の人間としてもっと尊重されるべきではないでしょうか。スウェーデンにおける人権教育と比較すると、日本の子育てや親子関係のあり方には、改めて問い直すべき点が多く存在しているように感じられます。

誰もが夢をえがくために

ひとり一人が尊重され自分らしく生きる社会へ

日本においては、「幸せ」になるためのルートの多様性が乏しいからこそ、親は子どもの人生を1つの正解ルートに乗せることに必死になってしまうのではないのでしょうか。その結果として、親は子どもの人生に過度に干渉し、子ども自身が主体的に人生を選択し、構築していく機会は失われていきます。これは親子双方にとって自分の人生を見失ってしまう可能性があり、不幸なことではないのでしょうか。

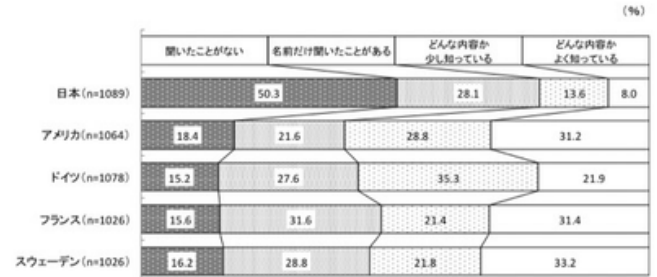
本来、「幸せ」は人によって異なるものであるはずですが、だからこそ、一人ひとりが持つ価値や選択を尊重するための高い人権意識が重要になるのではないのでしょうか。子どもを一人の人間として捉え、その意見や選択を尊重する社会では、それぞれが自分らしい生き方を選び取ることができます。一人ひとりの意識の変化が、子どもたちが夢を描き、自分らしく生きていける社会を形成していくのではないのでしょうか。



11 こどもの意見

(1) 意見表明権の認知

Q15 あなたは、子どもには「自分に関係することについて、意見や気持ちを聞いてもらえる権利」（意見表明権）があることを知っていますか。（回答は1つ）



参考文献

- ・こども家庭庁 長官官房参事官（総合政策担当）、2023、「我が国と諸外国の子どもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」（調査実施：株式会社インテージリサーチ）
- ・明光ネットワークジャパン、2026、「教育費用に関する実態調査2025」（調査実施：株式会社明光ネットワークジャパン）





夢を描ける親子、子育て地域社会へ

執筆：小澤美妃（明治大学国際日本学部）

今、日本の子供や親は夢を描けている？



今回、『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』講演会を通して、最初の準備段階で私が感じていたことは、子供が「夢を描く」ことが何だかしっくりこないという点でした。言わずもがな、私も日本で生まれ育ち、『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』P7で成田先生がおっしゃっていたように、いい学校→いい会社=お金を稼ぐという親の価値観のもとで、ひたすら目の前の学業の成績や進学先の現実を親と共に見てきました。日本財団18歳意識調査でも、自身の将来について夢を持っている日本の若者は60%と6か国中（スウェーデンは含まれていない）最下位で、やはり日本の若者が夢を描くことへの違和感を感じる方が多いのではないのでしょうか。今回私自身スウェーデンの子育て・社会の価値観を学んで、凝り固まったこれまでの価値観をほぐしていくことはとても大切であると感じました。まずは、下の2つのコラムで本や講演会から学んだことを紹介します。

他の国を知る

やり直しがしやすいスウェーデン社会

講演会を通して、スウェーデンで子育てを経験している久山さんからは、スウェーデンは人生やり直しができる社会だと伺いました。実際、高校卒業後すぐ進学する人の割合は38%と、日本の令和6年高卒者進学率8割と比べると、かなり低いです。

「いい高校→いい大学」の価値観を持っている人であれば、スウェーデンの残りの進学しない62%の高卒者に驚くかもしれません。

では、なぜこんなに自由に人生のレールを敷けるのでしょうか。もちろん、大学進学のコストがかからないことはとても大きいですが、考え方として、日本が参考にできることは、「理想に近づきたいならリスクをすればよい」という心持ちだと思います。リスクは文字通り、reskillingで、自分のスキルや知識をアップデートし新しい仕事に向けて学び直すことを指しています。久山さんのお話でもリスクという単語が自然と使われていましたが、またいつでも学び直して仕事を変えればよいという感覚がごく当たり前を持つことができるようになれば、なりたい理想を持ち続けられると感じます。Re（再び）の考えを仕事や人生観にうまく当てはめることができれば、どんなに自分や他人の職業が様変わりしても驚きませんし、人のキャリアに偏見を持ちにくくなるのではないのでしょうか。

今の日本を知る

日本の子育て地域社会の問題

夢を描くことは、周りの環境に不満がある時や疲れ切っている時、ストレスがかかっている状態ではできません。日本の一発勝負の人生のレールや、閉鎖的で同調圧力の強い子育て社会はまさに、子供が夢を描ける精神状態を崩してしまっています。まずは、一番最小単位の空間である家庭の中の親個人が、今までの子どもがあるべき幸せの考えを変えていくべきだと思います。親一人ひとりの考えを変えていくには、本や講演会などを通して、スウェーデンの切り口から子育ての新しい価値観を得たり、「子育て科学アクシス」のような、親主体の子育て相談所に身を置くことが必要です。また、そこから大きく円を広げて、最小単位の家庭内から、同調圧力の強いとされる日本社会、地域全体で親子が夢を描ける子育て社会を作っていくべきではないかと思っています。現在の日本の子育て地域社会はどのような現状なのでしょう。

トラストバンクが行う、子育て世代への政策と税金に関する意識調査では、日本の子育て環境に地域差があると「とても思う」、「まあそう思う」と回答した割合が全体の84%を占めています。この調査の対象者は、日本全国の小学生以下の子どもを持つ20~49歳の“親”です。（*データ1）

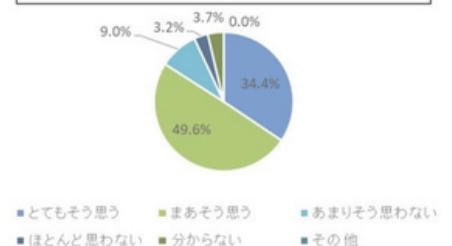
周りを知る

周りに言い易く受け入れられ易い社会

左の「やり直しがしやすいスウェーデン社会」では、スウェーデン社会でのやり直しのききやすさやリスクの考えが、他人の人生やキャリアに偏見を持ちにくくしているのではないかと述べています。『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』や講演会では、スウェーデンで大幅な職業転換や人生の変化を決断した人（久山さん自身も含め）がたくさん紹介されていたのが印象的でした。そして、そういう人に対して周りとはやかく言わず、「こういう人もいるんだね」と自然と受け入れてくれるスウェーデンの雰囲気を感じました。このように、やり直しのしやすさだけではなく、多様性のある個人の人生に興味を持ちつつも、受け入れる社会を作るには、閉鎖的ではなく、いろいろな生き方をしている周りを知る機会を作ることも必要だと思いました。

まずは、固定的な価値観や今までの職業論理感を持っている親が、周りを知りながら子育てをし変わる必要があります。実は、親主体かつ、第三者の意見を取り入れられる子育て相談所というのは日本もスウェーデンもまだまだあまりないと成田先生はおっしゃいます。成田先生が運営されている、「子育て科学アクシス」では、子どもが主語ではなく、親にも寄り添い、いい学校→いい会社だけでなくない生き方や幸せを知るためのアドバイスを行っています。

Q 子育て環境に関して地域間の格差があると思いますか？ (n=1077)



データ 1



夢を描ける親子、子育て地域社会へ

執筆：小澤美妃（明治大学国際日本学部）

・地域はあなたにとってどのような場所かと聞かれた際に、「当てはまる場所はない、分からない」と答えた人の割合

日本	38.5%
スウェーデン	7.1%

データ2

実際に、こども家庭庁実施の地域子育て支援拠点事業の実施状況を都道府県別で見ると、一番多い県で東京都701か所、一番少ない県で滋賀県26か所と、日本全体で最大で675か所の開きがあることが分かりました。

また、“子ども”を調査対象に、我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査を用いて、日本とスウェーデンの成人（18歳）未満の地域居場所感を調べると、スウェーデンは7.1%が「地域に自分の当てはまる場所はない、分からない」と答えた一方、日本は38.5%がそのような回答をしました。（*データ2）

このように、親目線で見ても、子供目線で見ても、日本の子育て地域社会に対して格差や孤立感を感じる人が一定数いることが分かります。

共につくる

これからの日本の子育て地域社会

日本の子育て地域社会の現状を見ると、安心して夢を描くというよりは、羽を伸ばせなかったり、現実的にまだまだ子育て地域社会に対して改善を求める人が多いと感じます。ただ、これからどのような改善を求めているかという点、日本ではお金に注目する人の割合が一番大きいという結果が出ています。トラストバンクの調査の中で、居住先の自治体でどういった子育て支援がさらに充実すると嬉しいか、という質問に対して、1番回答が多かった支援が教育・保育の無償化、2番目に多かった支援が独自の給付金でした。（データ3）

著書『スウェーデン流 夢を描ける子どもの脳の育て方』P76,77では、親たちの今の経済観念について、従来の価値観から抜け出せず、子供に投資をたくさんする以上リターンや真っ当な育ち方を期待していると述べられています。それにより子供のメンタルの変化に気付かず、子供は心身が崩壊してしまうことがあります。久山さんのお話の中では、スウェーデンの子どもたちが18歳で自立できるよう、親たちが自分たちの経済計画もしっかり立てているとおっしゃっていました。とりあえずお金をかけて子供に寄り添うことをおぎなりにするのではなく、子供たちの興味関心苦手に寄り添い、必要なお金を考えていけるように、地域での給付についてやみくもに配布することは避けるべきだと思います。これからの子育て地域社会では、スウェーデンのように、子供が18歳で自立し、何かしらで食べていけるように、興味関心を広げ、周りの多様な生き方に触れる機会を増やすことが必要で

Q 居住先の自治体で、どういった子育て支援がさらに充実すると嬉しいですか？(n=1077)



データ3

あり、その機会の充実度において全国的に調査し、格差を減らすために足りないところは経済的に支援していくことも大切だと感じます。従来の価値観から抜け出すのは親も大変ではありますが、親自身の「これでいいのかな」にも寄り添う必要があります。これからの日本の子育て地域社会での、お金の支給にとらわれず、親と子のメンタルや多様性に目を向けた支援が、日本の親子が夢を描く一歩となると思います。

スウェーデンが教えてくれたこと：日本の将来の親子が夢を描けるようになるには？

スウェーデンの子育てのお話を聞いて感じたことは、子供の人生において、「こんなふうになっちゃった」と親が成り下げて考えることはほとんどないということです。「こうなったらこの子は将来どう進んでいくのだろう？」と興味を持ち、親子が楽しんで共に成長しています。過度な課金やネームバリューにとらわれない、スウェーデンの親子共に育っていく姿は、日本もお手本にできるのではないかと思います。人生の多様性を受け入れる雰囲気や、やり直しがきくがゆえに、自分の人生単位で逆算をしてなりたい像を模索する姿は、夢を描きやすい環境のヒントを得ることができるのではないのでしょうか。まずは親自身が凝り固まった考え方をほぐしていくことが重要ですが、今後は範囲を広げ、全ての人を対象にした「子育て科学アクシス」のような場所で、子供たちの可能性についてポジティブな議論が活発にされていくような地域社会であれば、親は夢を描け、子供にかかるストレスも減らせるのではないのでしょうか。スウェーデンは一つの切り口にすぎませんが、その雰囲気や考え方はプレッシャーの強く疲弊した日本の親子が再び夢を描けるような、人生の構え方のさじ加減を教えてくれていると思います。





自分のやりたいことを考え、実現できる社会へ

執筆：三井彩加（明治大学国際日本学部）

「仕事」は人生の中心であるべきか

仕事が生来のすべてになってしまう日本人

講演会を通して、スウェーデンと日本との間で私が一番大きな違いと感じたことは「一人ひとりが自分の人生に責任を持ち、幸せに生きられるようにしているかどうか」でした。スウェーデンでは、自分のやりたいことをじっくりと考える、親になっても自分の時間を大切にするなどといった姿勢が広く見られますが、これらの行動は、生活の第一に自分自身が幸せに生きるためにはどうすればよいかを考えているからこそ生まれるのではないかと感じました。一方、日本では、良い大学に進学し、安定した会社に就職し、安定した収入を得ることが「人生の模範ルート」として長く共有されてきました。しかし、それが本当に個人の幸せにつながっているのかについては改めて考える必要があるのではないのでしょうか。また、この価値観のもとでは、良い会社に就職すること、すなわち職業選択が人生の最終決定であるかのように考えられがちです。仕事は生活を支える重要な要素ではありますが、日本では仕事が人生設計の中心に捉えられやすく、仕事を軸に人の価値が測られてしまう傾向があるように感じられます。ワークライフバランスの実態に関する調査の結果によると、日本では過半数が仕事を優先しているのに対し、スウェーデンでは過半数が家庭・個人生活を重視しており、真逆の結果が見られました。日本人は「一般的に良いとされる幸せ」、つまり仕事の良し悪しに重きを置きすぎるあまり、個人としての幸せについて主体的に考えながら生きることが苦手なのではないかと感じました。

仕事と家庭生活と個人の生活の優先度についての現実 (%)

	仕事を優先	家庭生活を優先	個人の生活を優先	無回答	
日本 (n=1,372)	51.8		34.8	12.2	1.2
フランス (n=1,000)	38.6		40.4	19.8	1.2
ドイツ (n=1,022)	32.3		45.8	20.8	1.1
スウェーデン (n=1,000)	32.0		51.3	15.3	1.4

安定を求める社会が奪っているもの

日本の模範ルートが生み出す安心と息苦しさ

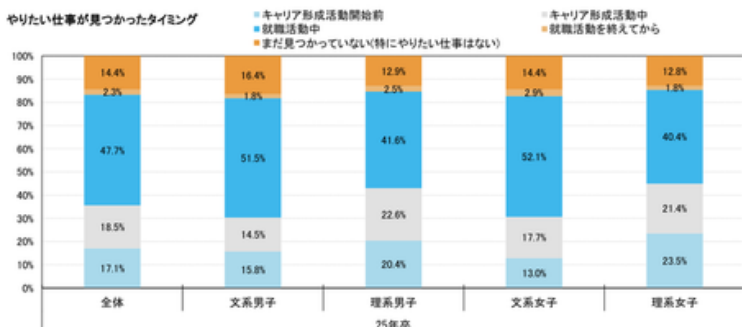
日本では、「幸せ」、すなわち人生の最終目標としての就職を成功させるために、子どもたちは幼少期から多くの時間を学習塾や習い事に費やし、場合によっては休日まで予定に追われています。本にも記載されていましたが、スウェーデンにはお勉強系の習い事文化は存在しません。スポーツや芸術系などで子どもがやってみたいことがあれば習いごとに通ってみるというように、子ども自身の興味関心を育む環境があると感じます。一方、学歴社会が激化する現代の日本では、中学受験を見据えて、小学校低学年から学習塾に通うことも珍しくありません。しかしそれらの選択は子どもたち自身が望んで行っているものなのでしょうか？多くの場合、親が格差社会の中で自分の子どもをできるだけ有利な立場に立たせたいという思いから、幸せな人生を送るための「模範ルート」に子ども乗せようとしているように感じられます。我が子に安定した道を歩ませたいと思うことは決して悪いことではありません。ただ、とりあえず良い会社に入ることを目指して幼少期から勉強だけ続けた結果として、子どもたちが自分自身の「将来やりたいこと」を考える力を失ってしまっているとしたら、それは大きな問題ではないのでしょうか。子どもの価値観形成に強い影響を与えるのが親である以上、大人側のキャリア観が子どもの可能性を狭めていないかを、問い直す必要があるように感じます。

日本の就職活動が抱える違和感

また、就職活動は仕事を重視する日本人にとって重要なものとされていますが、日本の就職活動の在り方は、海外から見ると特異なようです。日本では、多くの大学生が大学卒業前に一斉に就職活動を行い、「新卒」という一度きりの機会に進路を決定しなければなりません。「人生の模範ルート」に沿って、受験合格を目標にとりあえず勉強し、キャリアの解像度が高くないまま大学へ進学する学生も少なくないのではないのでしょうか。そして大学進学後は、自分のやりたいことが明確でなくても、「新卒カード」を活用するために周囲と同じタイミングで就職活動を始めていきます。このような仕組みは、安定性や職業選択の機会を保証する一方で、立ち止まって考えたり、挑戦や方向転換をすることを、難しくしていると考えられます。



日本の大学生は将来の夢を持っている？



マイナビが実施した2025年卒の大学生を対象としたアンケート調査によると、就職活動を開始する前から就きたい仕事が決まっていた学生は全体の約17%にとどまっています。また、全体の約14%は就職活動を終えた後もやりたい仕事が見つかっていませんでした。この結果から、大学入学の時点で将来の仕事を意識し、それに関連する学問を踏まえて学部を選んでいる学生は決して多くなく、大学での学びを将来の仕事に活かすことができていないケースもあると考えられます。そもそも、自身のやりたいことや目指す方向性が明確でなければ、学びや経験を積み重ねることは難しく、「夢を実現させる」というプロセス自体が成立しにくくなります。この点を踏まえると、幼少期～大学にわたって将来像を具体的に描く機会が不足していることが、進路選択を主体的に行うことの難しさにつながっている可能性があると考えられます。



自分のやりたいことを考え、実現できる社会へ

執筆：三井彩加（明治大学国際日本学部）

スウェーデンの大学生

一方のスウェーデンでは、高校卒業してすぐに大学に進学する人は多くありません。高校卒業後すぐに大学進学する学生は全体の38%しかおらず、54%はそのまま就職します。また、スウェーデンでは高校卒業後は親元を離れて独立し、一人暮らしを始めることが一般的です。そのため、大学に行かない若者は、自分のやりたい職に就いたり、アルバイトなどをして生活費を稼ぎながら、自分の将来について考え、就きたい仕事に高度な学問が必要となれば、その後大学に進学します。とりあえず流れに乗って進学する傾向が強い日本と、大学進学はマストではなく明確に学びたいことがあれば大学へ進学することもあるスウェーデンとでは、進学に対する考え方に大きな違いがあることが分かります。日本とスウェーデンでは大学の意義が異なり、スウェーデン人にとって大学とは将来の自己実現のための学びの場としての位置づけがあるように感じます。

スウェーデンから学ぶキャリア教育



自分のキャリアに選択に責任を持つ

調査を通じて、日本の子どもたちが夢を描けるようになるために必要なのは、子どもたちのキャリア選択の力を後押しすることではないかと思いました。そのためには何が必要なのでしょう。スウェーデンで実際に行われている制度を見てみましょう。

子どもたちへのキャリア教育

スウェーデンでは中学2年生になると、最低10日以上職業体験をすることが義務づけられています。この職業体験では、生徒が将来の進路選択やキャリア選択のために知識と経験を得ることが目的とされています。体験をする職場先は、基本的に子どもが自分たちで探すため、体験したい職場を決めたらそこに子どもたち自身が連絡をとり、受け入れてもらいます。私も中学生の頃に職場体験がありましたが、期間は2日程度で、学校から割り振られた場所に行っていました。また、日本では中学生の職場体験は義務ではないため、学校ごとに実施に差があるようです。

スウェーデン式の職業体験では、自分でやってみようという過程で、子どもたち自身が自分のやりたいことを現実的に考えることを後押ししており、初等教育という早期の段階から、教育課程の中に労働市場と接点を持つ仕組みが制度化されています。

職業学校や大学

日本の高等学校にあたるスウェーデンの中等学校は同じく原則として3年間で、大学進学課程/職業課程の2つがあり、職業課程にはさらに12の職業別のコースに分かれています。スウェーデンでは、全体の約半分が職業課程に進み、職業課程の中の教育訓練では全体の50%が実地教育を占める「デュアル・システム」が実施されています。高校に入学する段階で既に多くの学生が将来の仕事を現実的に考え、実践に移っています。日本では約98%が高等学校へ進学しますが、その中で職業高校生は約19%しかいません。スウェーデンと比較すると職業教育の比重が低く、大きな差があることが分かります。また、スウェーデンでは中等学校卒業後いったん就労してから大学に進学することは珍しくありません。これには、スウェーデンの大学までの教育費が無料であるということが大きく影響しており、子どもは焦らず自分のペースでキャリアを描いていきます。

大人になってからも

夢の実現を応援する制度

スウェーデンにはTjänstledighet（休職して学ぶ権利）という制度があります。一定の条件を満たせば、新しい知識やスキルを得るために仕事を休み、学業に専念することが労働者の権利として法律で保障されています。そして、休職期間が終わり仕事に戻ると、休職前と同じ待遇で職場に復帰することができます。スウェーデンではキャリアパスを自身でデザインするというのが一般的な考えであり、この制度により子どものうちだけでなく、大人になってからの夢の実現やキャリアの修正が社会全体で支えられています。キャリアの修正が可能という安心感のおかげで、若者がキャリアについて考えるときにも挑戦がしやすくなっています。

日本でも令和7年の10月から「教育訓練休暇給付金」という制度が創設されました。職業に関する教育訓練を受けるために、離職することなく休暇を取得して仕事から離れる場合、期間中に失業手当と同じ額を受け取ることができます。できたばかりの制度で認知度が低く、給付日数にかなりの条件がありますが、今後の日本の社会人のリスキリングを促進していくかもしれません。

次世代の子どもたちのためにできること

日本とスウェーデンを比較して、どちらが優れているか単純に結論付けることはできません。しかし、子どもが自分自身の興味関心に基づいて就きたい職業を考え、それを選択できる環境は、子どもが幸せに生きるためには必要であると感じます。キャリアの正解は一つではありません。人生で最も長い時間を費やす「仕事」において、自分のやりたいことを実現できるということは、やりがい、ひいては幸せにつながる非常に意味のあることなのではないでしょうか。スウェーデンには子どもたちの将来像を意識させるキャリア教育や自分のペースで学びを続けられる制度が整っています。こうした過程を通して、仕事は人生のすべてではなく、数ある選択肢の一つであるという価値観が育まれるのではないのでしょうか。この価値観は、仕事とライフのバランスをとった働き方を可能にしている要因の一つではないかとも考えられます。子どもの選択を尊重し、親自身も幸せに生きることを大切にスウェーデンの姿勢から、日本の仕事や子育てに偏りがちな息苦しい社会は、多くのことを学べると感じます。全ての仕事は社会に必要なものであり、職業によって人の価値が測られるべきではありません。次世代の親世代を担う私たち自身がキャリア観を見直し、子どもたちが自分らしい選択を考えられるよう社会全体で後押ししていくことが、これからの社会に求められているのではないのでしょうか。

参考文献

- ・マイナビ 2025年卒学生就職モニター調査8月の活動状況 <https://career-research.mynavi.jp/wp-content/uploads/2024/09/s-monitor-25-8-001.pdf>
- ・マイナビ子育てワーク・ライフ・バランスの理想と現実 | 日本とスウェーデンでは結果に大きな違いも <https://kosodate.mynavi.jp/articles/22837>
- ・Glolea AI時代突入！ デジタルネイティブ世代のスウェーデンの「キャリア教育」& 自分で体験現場を探す「職業体験」とは？ <https://www.glolea.com/ambassador/eri-swe/sweden-job-shadowing-education.html>
- ・スウェーデンにおける若年者雇用と職業能力開発 <https://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2012/special/pdf/054-063.pdf>
- ・キャリアを自由にデザインするスウェーデン流の働き方 <https://sekai-ju.com/life/swe/cARRIER/swe-work/>
- ・厚生労働省 令和7年10月から「教育訓練休暇給付金」が創設されます https://www.mhlw.go.jp/stf/web_magazine/closeup/06.html



北欧×日本インタビュー

ー多様な分野の当事者が語る
北欧からみる日本と日本からみる北欧の実像ー

インタビュー相手

記事作成者

1. 北欧留学生

王 雅美

2. グスタフ・ストランドルさん

鈴木 芹里乃

3. 矢口岳さん

南川 あずさ

4. 下鳥美鈴さん

南川 あずさ

5. GEN TAKAGI (高城元) さん

中村 亮太

6. 馬場ゆうきさん

中村 亮太

北欧留学生



Pickup! 北欧留学生5名へのインタビュー

国際日本学部に留学する5名の北欧留学生にインタビューを行いました。

留学生の出身国での専攻は様々！今回のインタビューに協力してくださいました学生は、国際日本学部留学中の、ノルウェー・ベルゲン大学より日本語専攻2名、デジタル文化専攻1名の3名と、スウェーデン・セーデルトーン大学より報道専攻の学生1名とスウェーデン・カールスタッド大学より国際ビジネス専攻の学生1名でした。



教育をテーマに、学生生活(高校&大学)、主権者教育、将来ビジョンの3つの視点から様々な質問に1h近いロングインタビューに協力いただきました。第一弾として、学生生活編をお届けします。

Topic! 学生生活の違い～高校の授業編～

高校の時間割は日本の大学みたい？！

「スウェーデンの高校は、日本の大学に似ていて、学生自身が授業を選択し、組み合わせで時間割を作成します。」と話した学生。「人によって何をテーマにするのか(何を学びたいのか)で、時間割は変わります。私は音楽に興味があったので音楽の授業を多めに取っていました」と話していました。

CAD?を使った授業！

「高校時代1番楽しかった授業は、CADを使った授業です。CADを使って、ミニチュアを作成しました」と話した学生。CADは建築物の設計や製図を行うソフトです。普通科の高校でそのようなソフトを使って作る授業があり、選択できることを聞き、驚かされた話でした。

Pickup! 先生と学生の距離感—高校と大学でのギャップは？—



日本では、比較的距離感・上下関係を感じやすいと話されている(筆者自身や筆者周囲の経験)教師と生徒の関係性ですが、北欧ではどうなのか？学生に高校と大学時代両方での先生と学生の距離感について聞いてみました。

「先生へのリスペクトの気持ちはもちろんあるけど、ヒエラルキーのようなものはないのでフラットな関係だと感じる」と話す学生が多かったです。また、「先生のことをラストネーム(名字)で呼んだことがなく、ファーストネーム(下の名前)で呼んでいた」と話す学生もいて驚きました。「大学よりも高校の方が、相談に乗ってもらえる・信頼できる先生がいた、先生との距離が近いと感じる」と話す学生が多く、印象的でした。

Topic! 大学面の違い

◎出席を取られること

留学する本大学・学部の良いところとして多くの学生が、「出席が取られること」と答えました。

ベルゲン大学の学生は、「大学に出席システムが無いから、驚くと同時に良いシステムだと思った。出席システムがあると通学へのモチベーションが維持しやすくして良い」と話していました。

◎年齢

次に、学生からよく聞かれた声として日本は「年齢の若い学生が多い」ということです。このことについて「同じ年がなくて寂しい、少し残念」といった意見がありました。

というのも、今回インタビューを行った学生は、21歳の2名を除き、過半数は27～28歳でした。

北欧では、高卒すぐに大学進学する人数はそこまで多くなく、日本と比較して年齢がやや上なもの不思議ではないのです。



インタビューした学生の中には(ベルゲン大学:28歳)、1度コンピューター分野で学士取得→就職→再度日本語専攻として就職前と同じ大学に入学→現在の留学に至るという経歴の方もいました。

ベルゲン大学の学生で、「自分の祖母は50歳から大学入学した」と話し、「それはとても珍しいことではない」と続けて話しました。

北欧留学生



Pickup! 学生生活の違い～大学生編～

1. 講義は短期集中型？

大学生活にしてインタビューを行ったところ、スウェーデンのセーデルトーン大学の学生から、大学の講義システムについて面白い話が聞きました。彼女の大学の場合、「1つの授業を3～5週間かけて完成させる。例えば、歴史の授業を取った場合、歴史の授業のみ3～5週間かけて受けます。5週間かけて授業が終了したら、新たに次の授業を取る形です。」といった話を聞きました。

2. 北欧大学生のアルバイト事情

ノルウェーのベルゲン大学の学生にアルバイト事情を聞くと、彼は、「アルバイトをする学生はとて多いよ！サマータイムジョブが人気だね。学業に基本的に集中したくて、勉強しながら働くということはしたくないから、長期休暇中の3ヶ月限定の短期バイトが多いね。」と話しました。また、日本の学生のアルバイト事情について話すと、「大学の授業と同時にバイトもやるなんて信じられない…！とて忙しいよね！」と驚きと共に関心を持って聞きました。



Topic! いじめの問題について

いじめはあるけど、、、

学生にいじめについて聞いたところ、「あった。」と全ての学生が答えたことにややショックを受けました。しかし、「全体的に少ない。肌の色や国籍を理由にいじめられることは絶対はない。」「中学生の時に少し、ただ思春期の時に訪れる一時的な混乱によるものだと思う。」「暴力といったいじめは無かった。」という答えが多く見られました。

一学校と距離を取る、転校

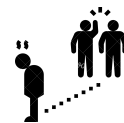
実際にいじめを受けた学生の話をご紹介します。

彼は「小学生の時にいじめを受けた。毎日というわけではないが、しつこく続くこともあって、からかわれたりすることがあった。その影響で、クラスメートだけでなく先生のことも含めて、今日は行きたくないと感じる日は学校を休んだ。当時は大きな問題(学校に通えなくなった理由について)だと思っていたが、今思うと大した問題ではなかったと思う。また、悩みを相談できる先生がいつでもいて、理解してもらっていた。」と話しました。

ある学生は、「実際、私の姪が学校で問題を抱えている。姪の学校はとて田舎にある。そこでよく取られる対応は、いじめた側ではなく、いじめられた側が転校させられるというもの。つまり、いじめっ子たちと一緒にいじめを続ける友達を残す。一方で、被害者は別の学校へ行かされ、そこで“新入り”という理由でまたいじめられる可能性がある。一般的とまでは言わないが、残念ながらよくある現実だ。」と話します。

インクルーシブといじめ問題の関係

ノルウェーの学生は、私たちがインクルーシブな社会ではいじめは起こらないのでは？という質問に対し次のように答えました。「ノルウェーは比較的インクルーシブだと言われるが、だからといって「他の人と違う人」が好かれるとは限らない。ただ、法律上は「あなたはあなたらしくいてよい」という建前が整っている、ということであると私は考えている。」



北欧留学生



Topic! 北欧の主権者教育の実情を知る!



北欧の主権者教育

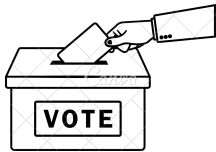
学校内の政治教育の形式やどんな学習方法があったか、そもそも何を学んでいたのか、北欧留学生に質問してみました。実際の学内外での政治への関わり方や、よく聞く模擬選挙の話、学生自身の経験による民主主義や政治の学び方についてリアルな意見を聞いてください。

学校内での教育—ロールプレイを通じた学び—

学習形式で印象的であったのは、ロールプレイ型ディベートの話でした。詳細について聞くとノルウェー学生は、「生徒は、二つの異なる政党に分けられて、それぞれの政党になりきり、模擬討論を行う。まず政党について少し調べて、そのあと先生がある課題や問題を提示する。生徒たちは、なりきっている政党の立場から議論を行う。といったものである」と話し、この話を聞き改めて実践的な学びが大切にされていると実感しました。

“政治信条は個人情報!”

インタビュー前は、勝手に、北欧では政治についてとてもオープンに話しているイメージがありましたが、多くの学生から意外な答えが聞きました。スウェーデンの学生は次のように話しました。



「私は、政治について、どの党に投票したか、どういう基準で投票するかといった話は一切しない。それらは個人情報だからである。友人には、家族同士でもあまり話さない人はいるし、私自身も初対面の人と話すことではないと考えている。それは、人それぞれ考え方に違いがあると理解しているし、違うからといって衝突や気まずい関係をうんでしまうのは嫌だからである。」

Pick Up!

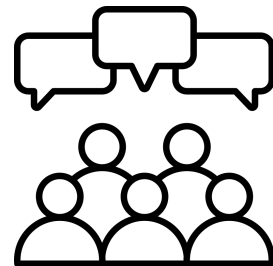
なぜ自分の国の投票率が高いと思う?

“投票を通して変える力を政府に示す”

スウェーデンの学生はこの質問に対し、「私たちは“投票したら変えられる、人はそのパワーを持っている”と政府に投票を通して示すことができるとわかっているから投票率が高いと考えている。」

“友人が投票に行っていないと知ったら怒るだろう”

続けて、彼女は「このように考えているから、もし友人が投票に行っていないことを知ったら、恥ずかしいことだと思うし、私は怒ると思う。講義で、日本の若者が政治にいかに関心がないかを知ってショックだった。政治に希望を持っていないことは良い状況ではないと思う。」と話しました。



北欧留学生



Question! 学校内で自分の意見が反映されていると感じた経験はあるか?

自分の意見が反映される機会、実感が得られるのはいつ?

学内の意見反映の機会、日本でいうと生徒会が挙げられるのではないのでしょうか?筆者の高校は、校則が厳しく、毎月、服装頭髪検査がありました。年に一度の生徒総会では、毎年のように校則の緩和の声が生徒から直接上がっていましたが、「検討します」との回答のみで、反映されることはありませんでした。生徒会はほぼ機能しておらず形だけであった記憶があります。北欧留学生に北欧の場合の実態を聞いてみました。

プレゼンで改革?—意見が反映されるまでの流れ—

ベルゲン大学の学生が自身の高校時代の生徒会について、教えてくださいました。

①学校に問題がある・ルールを変えたい

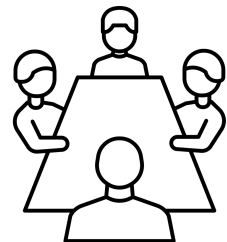


②生徒会がアンケートを取る(変えたいルールや問題の調査)



③アンケート結果を用いて、学校へプレゼンを行う

という流れでした。余談で、校則はあったそうですがとても少なく、特に服装など外見に関わるルールは一切なかったそうです。



教師アンケート

スウェーデンの学生は学内での教科アンケートについて話してくれました。「学生が教育に対して意見を伝える機会が確実にある。毎回の授業後、学生は教科の感想や意見を必ず書く。先生についての意見や改善できるポイントなどを記入する。これは授業をよりよくするものだし、実際にアンケートを通して授業が改善された経験があり、自身の意見が反映されていると実感する。また、学校に対して意見があり問い合わせると何かしら対処してくれるため、自身の意見が反映されやすいと感じる。」と話しました。

Question! 社会問題について学外で活動したことはあるか?

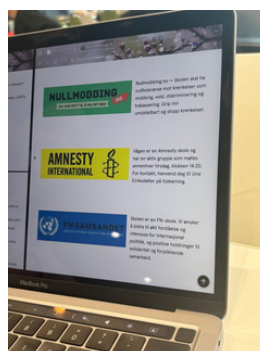
学外での活動は一般的で学生参加は、広く普及している

ベルゲン大学の学生によると、「大学では特に活発。活動内容としては、企業や学校でパレードに参加したり、Tシャツを販売してその利益で特定のグループをサポートする、署名活動を行う。」といった話が聞けました。他にも、「政党内でLGBTQや環境問題や人権についてのディスカッションに参加したことがある。」という声もありました。また、「政治家になるわけではなくても、そうした分野で積極的に活動している人たちがいた。自分が本当に伝えたいことや、影響を与えたいテーマを持っている場合もある。」との話も。

通っていた高校と団体が協力関係を結んでいた

ベルゲン大学の学生では、「高校以降に参加した。高校は団体と協力関係を結んでいた。自分はAmnesty Internationalという団体の活動に参加していた。防火用ブランケットを作成しそこに絵を描き、乾かしてから、地元のギャラリーに展示された。」と話してくれました。

参加できる団体が紹介されているサイト→



1番上の“NULL MOBBING”は「いじめゼロ」という意味でいじめを撲滅する活動を行う団体。

3番目は国連組織。学生の高校では、「毎年、ボリビアの子どものために募金活動を行っている」と話しました。

北欧留学生



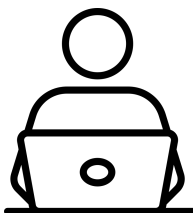
Pickup! 大学選択と職業選択

大学選択のプレッシャーは“ない”

日本は「良い大学に入りたい」といった考えが比較的多く、大学進学にプレッシャーを感じることもあるが北欧はどうか？学生たちは、「No(無い)」と答えた。スウェーデンの学生が話してくれたのは、「大学にランクは無いが、学ぶ内容によって入学の難しさがある。」学生本人の意見では、「経済は難しい」と話した。

就活で重要なのは就業経験と大学での学び —大学名はボーナス(加点)程度—

ベルゲン大学の学生は、就活について「就業経験が1番大事。履歴書を見て、就業経験が多ければ多いほどプラスになる。そして、次に重要なのが、大学での専攻(学位)が、応募した仕事に適合しているかどうか。もしマッチしていない場合は、就業は難しくなる。」他、「大学名は、ほとんど見ないがボーナスにはなると思う。」という話が聞きました。



Topic! 留学先に日本を選んだ理由

日本の暮らしを体験したかった！

このように話してくれた日本語専攻のベルゲン大学生。「そもそも、日本のアニメ・漫画・食べ物といった日本文化が好きで日本語を専攻した」と話します。

スウェーデンと全く異なる文化の面白さと興味

そう話したスウェーデンの学生。「日本に来たことが無く、社会の仕組みや文化が全く異なるところに面白さと興味を持った！正直、ヨーロッパは(国が異なっても)似ているところが多いし。」と笑いながら話した。「実際に来日して、食べ物も含めてとても気に入っている。」と続けて語った。

総括

これらの記事は、教育をテーマに、国際日本学部に留学する5名の北欧留学生へそれぞれ1h近いロングインタビューのもと、学生生活(高校&大学)、主権者教育、将来ビジョンの3つの視点から記事を書きました。教科書やネットだけではわからない、リアルな留学生たちの声が読者に届いたら幸いです。何よりも、インタビューに協力してくれた留学生の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです！！日本の留学生在が充実したものであることを心より願い、また再会できることを楽しみにしています。また、これらの記事を通じて多くの方が、北欧に興味・関心をもつきっかけづくりに貢献できることを強く願います。

将来プラン・目標

経済コンサルタント



国際ビジネス専攻のスウェーデン学生の将来プランは、経済コンサルタントになること。特に海外で仕事をしたいからだと言う。

日本の田舎暮らし

日本語専攻の学生が、老後のプランとして話してくれたのは、「日本の田舎暮らし」をすること。そのためにも現在日本語の勉強に懸命に取り組んでいると話してくれた。



司書の資格を取る



図書館学専攻の学生は、「学士を取り学校司書の資格を得ること」が今の目標だと語る。特に高校の司書は、就業経験や修士を持っている必要があると言う。

ジャーナリスト

報道専攻の学生は、「変わるかもしれないけど、今の将来プランはジャーナリストになること」と話す。加えて、「ドキュメンタリー映画を作ることに挑戦したい」と語った。



高齢者福祉をテーマに日本とスウェーデンで活躍

グスタフ・ストランドル



Topic! 来日のきっかけ

スウェーデン福祉研究所の所長を務め、浦安市の有料老人ホームで総支配人も経験したグスタフ・ストランドルさん。日本との深い縁、その原点は意外にも「剣道」にありました。武道を通じて日本文化や精神性に触れたことがきっかけとなり、関心を持つようになったといいます。その後、スウェーデンの大学に進学し、ある光景に疑問を抱きます。「なぜこれほど多くの日本人がスウェーデンへ学びに来るのか」。そこで日本とスウェーデンの文化や社会の比較研究を始めました。



日本のイメージの変化

来日前、彼が抱いていた日本のイメージは「GDP世界一の経済大国」。しかし1992年の来日以降、バブル崩壊後の停滞と急速な少子高齢化を目の当たりにします。時を同じくして、母国スウェーデンも1995年に世界一の高齢化社会に突入。「老い」という共通課題に向き合う国同士として、スウェーデンと日本との関わりは形を変えながら深まってきました。

日本とスウェーデンの福祉の違い

「お金で選ぶ」日本と、「税で支える」スウェーデン

まず、日本とスウェーデンは介護制度自体が異なると指摘します。

「日本の介護サービスは以前より格段に選択肢が増え、質も高まりました。利用者がお金さえあれば、さまざまなサービスを選べる時代になっています。しかし裏を返せば、お金がなければ望む介護を受けにくいという状況でもあります」
対してスウェーデンは、経済力によって介護が左右されない仕組みが確立されています。

「スウェーデンでは税を通じて社会全体で費用を支えています。経済的理由で介護を受けられないというケースはほとんどありません。日本は税金に対して抵抗感が強い傾向がありますので、それが制度拡充の壁になっています」
日本が今後制度を発展させる上で、「納得して社会にお金を回す意識」が重要だと語ります。

介護現場のリアル

離職につながる最大の壁は“人の理解”

介護経営に携わる中で痛感したのは、人材が定着しづらいという現実だといいます。

「介護職は稼げない。それでも続けるのは信念があるから」と言われる一方、現場の負担は重く、離職が後を絶ちません。また、特に若い職員にとっては患者を理解するのが難しいこともあります。

“人間関係の良さ”が現場を支える

介護現場ではケア技術に加えて、「人間関係の良い職場づくり」が不可欠です。信頼関係がある職場は離職率が下がり、認知症ケアの質も向上します。

そして「従業員の仕事観は個々でばらつきがある。そのため、介護職全体の意識水準をどう引き上げ、処遇や働き方にどれだけ投資するかは、運営法人ごとに大きく差が出るだろう。」と語ります。

日本社会の可能性

「秩序」と「努力」の国、日本

「日本の人々は、細かいことでも責任を果たそうとする意識が自然にあります。これは社会全体を支える大きな力になります」と、グスタフさんは語ります。

一方で、日本が抱える課題も率直に指摘します。治安や社会的格差など、まだ解決が求められる問題は多く存在します。「日本社会の治安に関しては、良いとは言えない。」

こうした現状を踏まえ、日本を「まだまだ伸びしろがある国」と位置づけました。少子高齢化や介護制度、労働環境の課題は大きいものの、国民の真面目さや努力を重んじる文化があれば、状況を改善し、社会をより良くすることは十分に可能だということです。

まとめ

認知症ケアや介護制度には依然として課題が多く、現場は過酷で人手不足も深刻です。しかし、職員同士の信頼関係やチームの雰囲気や介護の質に直結することも事実です。

また、日本社会の秩序や努力の文化は活かしようによって大きな力になる一方で、それだけでは問題は解決しません。制度の仕組みや働き方への投資と、現場のマインドをどう高めるかが、福祉や社会の質を左右します。

インタビュー実施日:2025/10/29

ALLT GOTT オーナーシェフ

矢口 岳



Topicl

東京・吉祥寺に息づくスウェーデンの古き良き味

ALLT GOTT・矢口岳シェフが語る、
伝統と文化の継承

東京・吉祥寺にあるスウェーデン料理店「ALLT GOTT (アルトゴット)」。シェフの矢口さんは、料理人を志し、20歳で吉祥寺の北欧料理店「ガムラスタン」に入店し、26歳でスウェーデンで料理修行をされました。帰国後「ガムラスタン」を任せられ、師匠の移転を機に独立、「ALLT GOTT」を開店。矢口さんは「スウェーデン料理が育ってきた吉祥寺で自分のお店を持つことができたのは嬉しいです。」と語ります。



伝統の"真の姿"を継承すること

矢口さんがスウェーデン料理に惹かれた理由は、「昔ながらの調理法の存在感」だったという。「スウェーデンには、冷蔵庫のなかった時代に培われた保存食文化があります。塩漬け、燻製、乾燥...いわば生きるための料理。食文化として主流ではないが、保存食文化が根底に残っていて、世代を越えて受け継がれている点に面白さを感じますね。」とおっしゃっていました。師匠は30年前の時点で、すでにスウェーデンのクラシックな料理を守る数少ない存在で、その技術をそばで学べたことが、矢口さんにとって大きな財産となりました。「スウェーデンで修業して初めて、師匠の料理がどれほど伝統だったのか分かりましたね。そして、ALLT GOTTに来た現地のスウェーデンの若者からどこか懐かしい味と言ってくれた時は嬉しかったですね。」

北欧料理は進化し続けている

矢口さんがストックホルムで修業していた頃、伝統料理は観光客には人気でも、スウェーデン人の中では下火になりつつあったそう。そんな中、デンマークのコペンハーゲンのレストランNOMAを中心に、伝統よりもアバンギャルドで芸術的な料理が注目を集め始めました。その流れはスウェーデンのストックホルムにも影響し、昔のスウェーデン料理とは異なる傾向にあるそうです。一方で、ALLT GOTTはクラシック。時代が大きく変化したからこそ、古き良き料理を守る。伝えていく重要性があるといえます。

ALLT GOTTという名前の誕生秘話

北欧との縁

"ALLT GOTT"は英語で"ALL GOOD"。実は店名にも、北欧との縁があります。矢口さんにはデンマーク人の親戚がいて、その方はデンマークでジャーナリスト、また編集局長を務めていました。その方が社内コンペを行い、10案程店名の候補を出してくれたそうです。



そして、選ばれたのが「ALLT GOTT」。約15年後、その名前を考えた本人が店を訪れてくれたそうです。「デンマークの新聞に載ったこともあって、デンマークからのお客さんも当時はよく来てくれました。」

取材の前には、ゼミ生でランチを
味わわせていただきました。



自家製アンチョビドレッシングのサラダ

前菜：
ノルウェー産にしんのディルマリネ
北欧風マスタードソース
ノルウェー産サーモンのグラバラス
はちみつマスタードソース



白糖産えぞ鹿肉のロースト
スウェーデン産リンゴンベリー添え
& 鹿すね肉の赤ワイン煮込み



スウェーデン風スパイスミートボール
リンゴンベリー添え
スウェーデンの伝統料理"ヤンソンさんの誘惑"
& ビーツポテトサラダ



↑
食器はスウェーデン王室御用達の
北欧食器「ロールストランド」

矢口 岳



北欧料理と日本料理は"似ている"

食文化の共通点

特に、保存食文化だ。

日本にも、干物や漬物など知恵と気候から生まれた保存の文化がある。スウェーデンにもそれは通ずる。

矢口さんはスウェーデンから南へ下がり、ヨーロッパ各地を訪れた経験がある。「移動するほど気づいたのは、食文化は北緯・南緯で似てくること。気候や環境に近い地域は、採れる食材や暮らし方が似てくる。その結果、料理の成り立ちもどこか近くなるんです。」



北欧に関わり続けている理由

「大それたことは思っていない。ただ、小さくても表現し続けられたら面白いなと。お客さんが"美味しかった"で終わってもいい。でもそこから少しスウェーデンや北欧に興味を持って、触れるきっかけになれば嬉しいです。お客さんの日常を少しでも彩れたらなと思います。」

北欧からみた日本とは

スウェーデンで印象に残った出来事が、矢口さんの人を見る視点を変えたそう。「スウェーデンで車いすの大柄な男性が扉を開けてどうぞと言ってくれたんです。私はハンディキャップのある方に対して、助けなければいけない存在だと思い込んでいたから、戸惑って言葉が出なかった。でも師匠に、ありがとうでいいんだよと言われてハッとしました。」

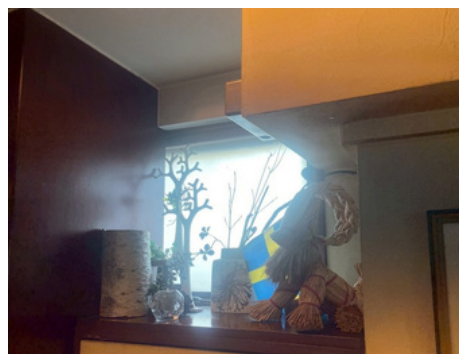
スウェーデンでは、障害のある人も自然に社会に参加できるようまちづくりがなされている。その姿、そして障害のある方への見方に日本との違いを強く感じたそうです。

今後の展望

「スウェーデンの"伝統的でクラシックなもの"を、これからも丁寧に伝えていきたいですね。スウェーデン料理は都内でも珍しいですし、スウェーデンに触れるきっかけになれば嬉しいです。」

スウェーデン人と日本人も"似ている"

矢口さんは、修業時代にスウェーデン人に接した時に、スウェーデン人は、非常に慎重で考え深く、軽率に話しかけてこないため、初対面では近寄りがたい印象を受けたそうです。「その距離は相手を不快にさせない配慮から来ており、こちらから自然に声をかければ受け入れてくれる。パーソナルスペースの感覚は日本人に近く、イタリアで働いていた時に会った陽気に話しかけてくるイタリア人とは対照的だなと感じましたね。」似たもの同士、どちらかが一步踏み出さないと歩み寄ることが難しいですが、スウェーデン人の特徴に気が付いてからは、一步踏み出して話しかけるように心がけたそうです。



下鳥 美鈴



Topic1 なぜ北欧へ？留学、研究、働くetc.

**北欧に興味を持ったきっかけは、
とてもシンプルだったそう**

東海大学の北欧文学科に進むことを決めたのは、「英語以外の言語も学んでみたい」という気持ちと、当時スウェーデンに住んでいた友人の存在が大きかったそうです。言語への興味、英語以外の言語を学びたい思い、友人がスウェーデンにいたことから、北欧に興味を持ち進学を決めたそうです。



**大学で言語に触れるうちに、
その興味はどんどん深まっていく**

そして大きな転機となったのが、ストックホルム大学での学びです。出会った先生たちは、興味をしっかりと受け止め、さらに広げてくれるような存在でした。指導に支えられ、言語そのものへの関心はさらに加速しました。スウェーデン語のみならず、言語そのものに興味を持ち、博士課程まで進むことを決意したそうです。北欧への素朴な興味から始まった道は、学びを続けたいという強い意志へとつながり、下鳥さんの人生の方向を大きく広げていったようです。

北欧の学生の特徴とは？

自主性と「選択の自由」を重んじる教育文化

中学・高校・大学を通して、授業ではグループワークが非常に多いです。先生の説明を聞いて終わりではなく、先生の話をもとにテーマを考える、自分たちで調べる、結果をまとめて発表する。こうした「生徒が主体的に動く授業」が主流です。これが生徒の自主性を育てているといえます。

進路に関しては先生が介入しない

北欧では、進学は本人と家庭が決めるもので、先生はほとんど介入しません。中学から高校へ進む段階でも、「あなたはこの高校にしなさい」といった指導はありません。「進路は本人の選択」という前提が徹底しています。

また、北欧の学生の進路は多様で自由です。高校からすぐに大学へ進む、一度働いてから大学へ入る、ギャップイヤーを取って旅や活動をする、大学に行かず就職する、就職して経験を積んだ後に大学へ入り直す。どれもごく一般的で、先生は一切口を出さず、「本人の人生は本人が決めるもの」という価値観が浸透しています。また、子どもの進路に対して、親もルールを敷くことはありません。

経歴

1996年
東海大学北欧文学科卒業
1996年
スウェーデンに留学
2004年
ストックホルム大学
文学部言語学学科修士課程卒業
2013年
ウメオ大学文学部言語学学科博士課程修了
2013-2015年
ストックホルム大学勤務
2016-2019年
ヨーテボリ大学勤務
2020年～現在
ベルゲン大学文学部外国語学科准教授

博士課程では働きながら博士論文に取り組みます。研究と教育の両方を楽しみながらこなしていました。そして、次第に「大学で研究者として働きたい」という目標が明確になり、大学での正規雇用を探す中で出会ったのが、ノルウェーのベルゲン大学での採用でした。スウェーデンからノルウェーへ活動拠点を移す転機となりました。

北欧での子育て

下鳥さんは、スウェーデン、ノルウェーでの子育て経験があります。

親同士がつくるコミュニティ

「スウェーデンとノルウェーで共通していたことは、クラス単位で親がイベントを企画したり、親だけの連絡網をつくったりして、親同士のネットワークが強いことです」とおっしゃっていました。ここに先生は基本的に介入しないそう。

重視されるのは「安全」と「健康」

ノルウェーもスウェーデンも教育に関する意識は高いですが、学校からの連絡の中心は「学力」よりも「子どもの安全と健康」に関する内容だそうです。

2025年にノルウェーとスウェーデンが国境に“共同警察署”を設置することになりました。ギャング犯罪に若者が巻き込まれるケースが増加し、国境付近の治安強化が必要になったことが背景にあります。

ベルゲン大学准教授

下鳥

美鈴



スウェーデン語とは？

スウェーデン語の話者は約1000万人（スウェーデン国内）です。スウェーデンの公用語は、スウェーデン語（スウェーデンで話されている）です。他にも公用語としての少数民族言語が1999年から定められており、フィンランド語、サーミ語、ロマ語、イディッシュ語、メアンキエリ語、手話があります。背景には、少数民族の言語的権利を保障しようという考えがあります。また、地域ごとの標準語、つまり方言もあります。国が縦に長いからこそ、それぞれの地域で標準語があります。

さらに、スウェーデンの方言は発音や文法の特徴に基づいて、大きく6つの地域に分けられます。首都ストックホルムはSveamålです。



ノルウェー語とは？

ノルウェー語の話者は約450万人（ノルウェー国内）です。スウェーデンの半分です。ノルウェー語の公用語はノルウェー語（ニーノシュク、ブークモール）、サーミ語（2022年より）、手話があります。ノルウェー語は単に一つの言語ではないとよく言われます。その理由は、ノルウェー語の書き言葉には、ニーノシュク、ブークモールがあるからです。

歴史とアイデンティティが生んだブークモールとニーノシュク

ノルウェーは長く他国との連合に入っていたため、ノルウェーらしさを取り戻したいという気運が強まった19世紀に民族的ロマン主義時代がありました。1814年には自分達の憲法を制定しました。しかし、その後もスウェーデンとの連合は1905年まで続きます。この歴史背景から、独自の文化や言語への意識が高まります。当時の書き言葉はデンマーク語だったため、「話すノルウェー語と書き言葉を一致させよう」という動きが始まりました。その結果、2つの書き言葉が作られました。ブークモールはデンマーク語をベースにノルウェー語化された書き言葉です。ニーノシュクは、国内の方言を集めて作ったノルウェー独自の書き言葉です。

北欧に関わり続けている理由

「個人的な理由としては今まで出会ってきた北欧の人たちと、とても良い友情関係を築けているので、日本にいる友人たち同様に今後も関わり続けていきたいなと感じているのがひとつです。職場では学術的な面でのサポートは非常に有難いと思っておりますし、労働環境に恵まれているのがその理由になります。

私の言語学の研究においても、スカンジナビアの言語を中心に扱っているので北欧との関わりは今後も続いていくと思います。」

北欧からみた日本人とは

「外に出てみて初めて気づくことはたくさんありましたが、その中でも改めて認識したのは日本人の礼儀正しさや勤勉性が海外の人には高く評価されていることです。もちろん個人差はあるでしょうが、日本および日本人が北欧地域から良い印象をもたれていることは間違いのないと思います。」

今後の展望

「学生時代からあらゆる面で私を育ててくれ、成長させてくれた北欧の国には、今後も恩返しの気持ちも込めて貢献していきたいと思います。

また、日本人である自分が北欧から日本のためにできることを考えて尽力していけたらと思っております。」

GEN TAKAGI (高城 元)



Topic! GENさんの半生



もともとお笑いが好きだったGENさんは、爆笑問題に憧れて日本大学芸術学部に進学しました。しかし、卒業後はテレビ制作のADとして働くも挫折を経験。そこで、原点回帰として始めたのが、自らの日常をインターネットで発信することでした。

その中で、フィンランド人の妻との出会いを経て、「観客を日本人に限定する必要はない」と気づき、フィンランドでの活動に「全振り」することを決意し、自分がもともと好きだったお笑いや漫才を異国の地で広める今に至ります。

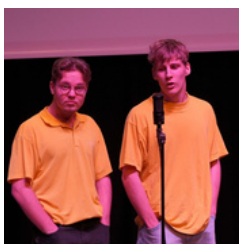
漫才の常識を塗り替える挑戦

日本の漫才に欠かせない「ツッコミ」は、フィンランドでは文化的な違いに直面することがあります。特にドライユーモアを好む一部のコアなファンの中には、お笑いにおいて「ボケを理解できたかどうか」を楽しむ、クイズのような感覚で捉える人もおり、そうした文脈ではツッコミが不要と感じられたり、あるいは「単なる説明」と誤解されてしまう場合があります。

文化は適応するだけではない

しかし、GENさんは「ツッコミ」を、一つの表現手法としてフィンランドへ紹介しています。それは日本の形式を絶対的な正解として普及させたいわけではなく、

あくまで「漫才というフォーマットにおける豊かな選択肢の一つ」としての提案です。既存の価値観に漫才やツッコミという新たな要素を加える、フィンランドにてお笑いの多様な在り方を提示するような活動を続けています。



今後の展望

GENさんの挑戦はまだ始まったばかりです。短期的な目標は、フィンランド人の漫才師を増やすこと。そして、長期的には日本の「M-1グランプリ」のような大会をフィンランドで開催し、将来的には「漫才世界大会」の実現も視野に入れています。

Pickup! 人生の目標とは

誰もいない最前線を目指して

GENさんの人生の目標は、「頂点」ではなく「最前線」に行くこと。彼が目指すのは誰もやっていない場所で新たな価値を創造することです。日本とは違い、フィンランドでは漫才師がほとんど存在しないため、フィンランドこそが彼が活動できる「最前線」でした。

成功への奇跡

hypecon



昨年には初の漫才コンテストがフィンランドのヒュペコンにて開催されました。当初は参加者不足が懸念されましたが最終的には5組が参加し、国営放送にも取り上げられるなど、大きな成功を収めました。

「お笑いは国境を超えることができる」

北欧では必須のテクニック!?

ドライユーモアとは

異常なことをさも当たり前のように言うボケ。ガラガラなカフェに対して

↓

「今日は大繁盛していますね」というなど

馬場 ゆうき



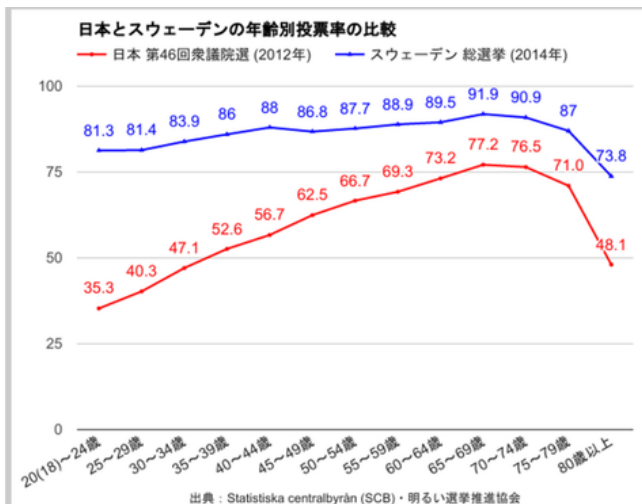
Topic! 平成生まれ初の国会議員



1992年生まれの馬場さんは、2021年に衆議院議員に初当選した際、全国最年少かつ初の平成生まれの国会議員として注目を集めました。銀行員、松下政経塾での経験を経て、国会議員となった馬場さんは立憲民主党の下、故郷である福島の復興や自身が若いということから、若者の政治参加といったテーマについて積極的に関わっています。さらに2025年には、衆議院議員を辞職し、福島市長選挙に当選。現職の県庁所在市長として初の平成生まれとなり、大きな期待を集めています。

そんな馬場さんに今回はスウェーデンと日本の若者投票率と主権者教育に関する質問を行わせていただきました。

選挙結果から見る日本とスウェーデン



日本で最も投票率が高い60代後半よりも、スウェーデンの若者のほうが選挙で投票している

全年齢	投票率平均
スウェーデン	: 85.9%
日本	: 59.7% (最新53.8%)

若者 (18~24歳)	投票率平均
スウェーデン	: 81.3%
日本	: 35.3% (最新34.6%)

政治家に聞く！

日本の若者投票率が低い理由とは？解決策とは？

日本の若者はスウェーデンのような国に比べて政党や政治家に「信頼」みたいなものを持っている人が少ないのではないのでしょうか。

だからこそ政治に無関心になり、選挙に行かない人が多いと考えています。

そのため、いきなり特定の政党との関わりではなく、例えば「いろいろな政党の集い」や「平成生まれの議員会」のような緩やかな集まりを通じた接点の増加が重要になってくるでしょう。

そうすることで、政治を「遠いもの」として捉えるのではなく、こうした「ガードが緩い」関わり方で心理的な抵抗をなくすことを実現することが、「信頼」や若者投票率を上げる上で重要なのではないのでしょうか。

馬場 ゆうき

日本と対照的な主権者意識：未来を決める教育のあり方

スウェーデンでは、充実したシティズンシップ教育（市民性教育）が若者の高い政治意識を支えており、これが高校生による「ユース党」の結成や、高い若者の投票率に繋がっています。



政党青年部：各政党とは別の独立した組織であり、18~35歳の若者しか入れない「ユース党」である。
若者の声を政治に反映する重要なチャンネルになっている。



学校の政治に関する授業で使われる
実際の教科書

日本の政治教育の在り方とは？

「我々が必要なのは政治教育ではなく「主権者教育」です」

政治教育というのは語弊を生む表現であり、政治＝選挙というフローで考えてしまう人が多いです。しかし、今の若者に必要なのは政治に関する知識もそうですが、主権者意識ではないでしょうか。

主権者教育において「自身の力で社会に影響を与えられる、我々が主権者、当事者であるという意識を育むこと」が若者の政治参加にとって最優先であり、そのための土台として若者の声を聴くような自治体が身近にあるべきでしょう。

若者が政治に参加する機会を

スウェーデンでは被選挙年齢は18歳にもかかわらず、日本ではいまだに議員の高齢化が叫ばれる中でも25歳や30歳であり、若者の政治参加に制限がある。

馬場さんは18歳への被選挙権引き下げについても精力的活動されており
在任中には、一から手作りで法律を作成し、党との協力もあり提出までこぎつけました。

馬場さんが思う18歳被選挙権年齢の意義とは？

「18歳という年齢ではなく、主権者教育の不足への問題提起としての面を見てほしい」

もちろん、18歳に引き下げることで若者が政治活動に参加しやすいという側面も重要です。一方で、18歳で政治家になれたときの学校への復帰などへの理解やシステムの面でもまだまだ課題というものは多いです。加えて、現状の小選挙区制では息のかかった候補者だけが残り、世襲や地盤の強さが大事になっている現状もあります。そこを、法案によってただ被選挙権を引き下げを行うのではなく、属性に関わらずどんな人でも政治家にエントリーできる法案を作りたいと考えています。

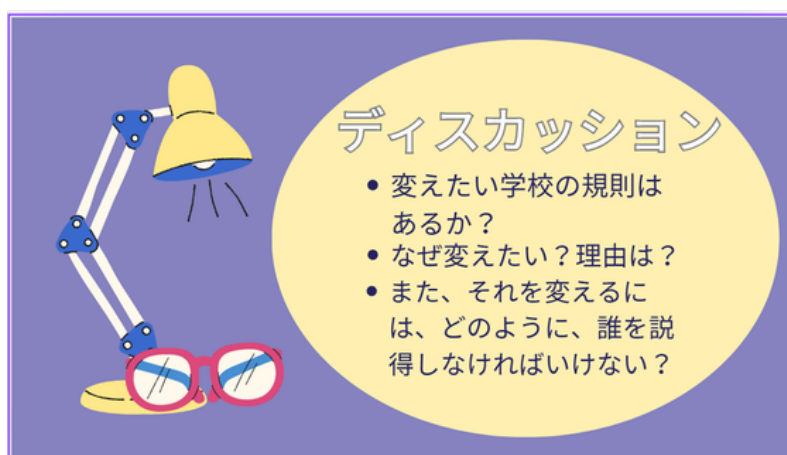
政治をもっと身近なものに ～ 高校における授業実践からの学び～

植村 崇由、上村 健太、山下 千尋

私たちは「政治をもっと身近なものに」というテーマのもと、東京都練馬区にある英明フロンティア高等学校の1年生を対象に、授業を実施させていただきました。

授業の前半では、スウェーデンと日本における若者の政治参加状況や政治に対する意識の違いについて解説を行いました。後半では、前半の内容を踏まえ、「変えたい校則はあるか」「それをどのような手順で変えていくことができるか」といった問いを軸に、ディスカッションを行ってもらいました。

また、今回の出張授業については、大学通信の方々に取材していただき、記事として取り上げていただきました。





北欧パビリオン・スウェーデン 政府代表インタビュー

嶋田未来

INTERVIEW

北欧パビリオンスウェーデン政府代表 へのインタビュー概要

大阪・関西万博に出展された北欧パビリオンについて理解を深めるためスウェーデン政府代表 セシリア・エクホルムさんへのインタビューを実施しました。

インタビューでは展示の構成やテーマに加え、北欧諸国が万博を通して伝えたい価値観や、日本との関係性について話を伺いました。会話の中ではcollaborationやtrustといった言葉が繰り返し使われ、北欧パビリオンが未来社会をどのように捉えているのかが印象的に語られました。



PAVILION

北欧パビリオンの 構成と特徴

北欧パビリオンは共同パビリオンであり、国別展示では「北欧としての共通性」を前面に出した構成となっています。展示では、循環型社会 (circularity)、モビリティやつながり

(connectivity)、ライフスタイルとウェルビーイングといったテーマが扱われており、北欧諸国が重視する社会の在り方が抽象的に表現されています。



万博テーマとの関わり

万博のテーマである「未来社会のデザイン」に対し、北欧パビリオンでは技術革新そのものよりも人や国のあいだの関係性が強調されていました。インタビューでは、国同士が長期的に協力し合う姿勢こそが本来社会を支える基盤であるという考えが示され、北欧地域で培われてきた信頼関係の重要性が語られました。

Cecilia Ekholm

今回のインタビューではスウェーデン陳列区域政府代表のセシリア・エクホルムさんにお話を伺いました。Expoは会場内で完結せず、日常につながるべきだという発言が印象的で、万博を一過性にしないという姿勢を感じました。



ECO-FRIENDLY

環境配慮とパビリオン運営

環境への配慮については、展示内容だけでなく、パビリオンの建設や運営にも反映されていることが説明されました。建設資材は日本国内で調達され、輸送による環境負荷を抑える工夫がなされているほか、労働環境への配慮など社会的持続可能性も重視されています。環境問題は特別なテーマとして扱われるのではなく、すでに社会の前提としてintegratedされている点が北欧らしい特徴であると感じられました。



NEXT CHAPTER

インタビューを通して

インタビューを通じて、北欧パビリオンは未来社会を「新しい技術」ではなく、「共有された価値観」から描こうとしていることがわかりました。こうした北欧の考え方が来場者にどのように受け取られているのかを明らかにするため、インタビュー後、万博会場にてアンケート調査を実施しました。



万博班

北欧アンケートin大阪万博

菊池 美羽

SURVEY RESULTS 北欧パビリオン来場者アンケート結果報告

調査概要

2025年度の鈴木ゼミ夏合宿にて、大阪・関西万博を訪問し北欧パビリオン来場者を対象にアンケート調査を実施しました。本調査では、来場者が北欧に対して抱くイメージや理解の変化、印象に残った展示内容、今後の渡航意欲などを明らかにすることを目的としました。

調査日数：2日間 有効回答数：687名
年齢層：10代~70代 性別：女性59.1%/男性39.7%



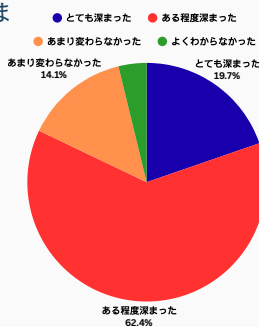
北欧パビリオンの展示の特徴と来場者の理解について



北欧パビリオンは「環境・サステナビリティ」を軸にした展示構成で、映像・音・空間演出による体験型展示を通して北欧の暮らしや価値観を体感できる設計になっています。

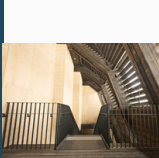
パビリオンを通して、北欧への理解は深まったかという質問に対して約8割が「理解が深まった」と回答。パビリオン展示が北欧社会・文化への理解促進に一定の効果を持っていることが示唆されます。

また、特に理解が深まった分野を問う質問では、「北欧の環境意識・サステナビリティ (61.6%)」と「働き方・暮らし方 (41.5%)」を挙げる回答が多く、北欧の特徴として語られがちな要素が抽象的イメージから具体的理解へと変化している点が特徴的で、展示で強調されていたテーマと回答結果が一致していることがわかりました。

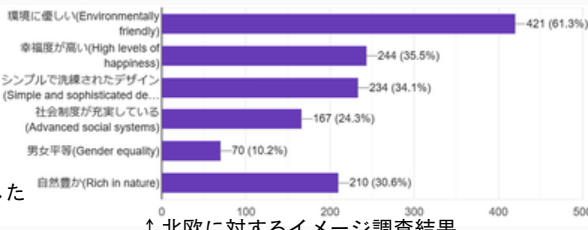


印象に残った展示と北欧に対するイメージ

来場者から特に評価が高かった展示は、映像コンテンツ (62%)、建築・空間デザイン (38%) でした。映像コンテンツでは、人・自然・社会の関係性を軸に北欧らしい価値観が映像と音によって感覚的に表現されていた点が評価された感じます。また、建築においては木材などの環境負荷の少ない素材を使用し、北欧の伝統的な納屋をイメージした形状で北欧らしいミニマリズムが追及された無駄のないデザインで機能性と美しさが両立されていた点が評価されたと感じます。「見る展示」よりも体験型・感覚的展示が強く印象に残る傾向がみられました。



↑木材を活かしたデザイン



↑北欧に対するイメージ調査結果

また、来場者は北欧パビリオンでの体験を通して、環境に配慮した社会 (61%)、人々の暮らしの豊かさ (35%)、デザインの高さ (34%) を北欧に対するイメージとして持つようになったことがわかりました。北欧に対し、「先進的で憧れの地域」としてポジティブな印象をさらに強めていることが調査からわかりました。

北欧への渡航意識について

パビリオンを通して、北欧に行ってみたく感じたかという質問では、「とても思った」が49.1%、「少し興味を持った」が45.1%で多くの来場者が北欧への渡航意欲を持ったことがわかりました。北欧5カ国をより知れる特設サイトでさらにパビリオンを楽しめる工夫がされていたことも要因にあげられると考えます。



↑北欧を旅できる特設サイト

特にどの国への興味関心が深まり、行ってみたいと感じたかという質問ではフィンランド (37.3%) が最も人気で、スウェーデン (21.3%)、ノルウェー (21.3%)、デンマーク (11.2%)、アイスランド (9%) が続く結果でした。フィンランドの回答の中にはムーミンやオーロラをあげる声が多くありました。また、大阪万博が実際の渡航意欲につながっていることがわかります。

まとめ

来場者アンケートを通じて、北欧パビリオンの展示は、映像や体験型コンテンツを通して来場者の北欧に対する理解を深め、環境・福祉・暮らしへの関心を高めたことがわかります。さらに、パビリオンを通して、北欧を「行ってみたい場所」として具体的に想像する来場者が多く見られたことがわかります。行ってみたい国でフィンランドの支持が高かった理由について、さらにこの後で深掘りします！

アンケート調査結果

<https://docs.google.com/spreadsheets/d/1BEnzev311s5R-eDstVk946xRctvhbgTKuWtuYhTEDYk/edit?resourcekey=&gid=51667991#gid=51667991>



万博班 フィンランドセンター所長 インタビュー

吉濱 花小里

INTERVIEW

フィンランドセンターインタビュー

万博アンケートの結果により、特に興味を持った国にフィンランドを上げている人が37.3%と、最も人気であるという結果が出ました。なぜ日本でフィンランドがそれほど人気なのかを知るために、フィンランドセンターの方にインタビューを行いました。フィンランドがなぜ日本で人気なのか、スウェーデンと他の北欧諸国との関係について質問しました。また大阪万博北欧パブリオンに対しての感想や意見についてもお聞きしました。



所長 JAAKKO NOUSIAINENさん

今回、フィンランドセンターの所長の方にお話しをお聞きしました。フィンランドセンターは、1996年に学術、文化の分野における活動と連携のために日本に設立されました。北欧諸国のなかでもフィンランドが日本で人気がある理由をいくつかの質問を通して理解することができました。



インタビュー内容

- ①日本でフィンランドが人気なのはなぜか
 - ・文化的に日本と似ている
 - フィンランド人の性格は控え目、誠実、正直であり、最初は控え目でも仲良くなると深い関係になるそうです。また約束やルールを守り、他人を尊重する点も日本人と似ているのではないかと話されていました。
- ②他の北欧諸国との違いは何ですか
 - ・文化的な独自性
 - スウェーデン語圏との文化的近さはある一方、ロシアなどの東側の影響も受けた特殊な歴史背景がある。
 - ・言語的な独自性
 - フィンランド語は北欧語と別系統で言語的にも大きく異なる。

大阪万博について

大阪万博の北欧パビリオンについての感想についてもお聞きしました。北欧5か国が長年続けてきた協働の精神を感じる事ができたと仰っていました。展示内容は北欧の強みを中心に構成されており、新しい情報を示しているわけではないが、日本人に北欧の興味を深め、旅行や柳垣の動機づけになる可能性があるかと評価されていました。



SUMMARY

フィンランドセンター所長へのインタビューを通して、フィンランドについて、他の北欧諸国との違い、日本で人気の理由などについてお聞きすることが出来ました。日本と人とフィンランド人の国民性の近さが、日本での人気の理由だと知ることが出来ました。



万博班

ムーミンから紐解く北欧の魅力

本林愛梨

INTERVIEW

なぜ日本人はムーミンに惹かれるのか

ムーミンはフィンランドで生まれた物語でありながら、日本でも長年にわたり親しまれ続けている作品です。大阪・関西万博の北欧パビリオンで実施したアンケートでは、「北欧諸国の中で最も好きな国」としてフィンランドを挙げる来場者が多く、その理由として「ムーミン」を挙げる回答が数多く見られました。さらに、フィンランドセンターへのインタビューにおいて「フィンランドのファン層が日本で大きく広がった特定の要因はあったのか」という質問を行ったところ、「日本で放送されたムーミンのアニメの影響が非常に大きい」という回答を得ました。これらの調査結果から、日本における北欧、特にフィンランドのイメージ形成において、ムーミンが重要な役割を果たしてきたと考えられます。本記事では、なぜ日本人がムーミンに惹かれるのかを手がかりに、日本とフィンランドをつなぐ文化的な共通点や、北欧の魅力について考察していきます。

ムーミンのアニメ

日本アニメの爆発的ヒット

トーベ・ヤンソンが生み出した「ムーミン」は、小説やコミックス、絵本など様々ありますが、その作品を原作としたアニメが日本で放送されると、非常に大きな人気を博しました。しかし、1960年代～70年代に日本で始まったアニメは、原作に基づいていないと作者からも不評であり、現在では放映もソフト化も禁止されています。その後変更が加えられて1990年に改めて日本でアニメシリーズ『楽しいムーミン一家』が放送されました。これを機に、よりムーミンは日本で広く愛されるキャラクターとして根付き、現在でも多くのファンがいる大人気キャラクターとなっています。ムーミンの作中で登場する個性豊かなキャラクターや、冒険、友情、家族の絆に関連したエピソード、自然との共存というテーマが日本人に親しみを与え、共感を得たと考えられます。

日本におけるムーミンの市場拡大

日本では、ムーミンは物語の枠を超え、生活に寄り添うブランドとして市場を拡大してきました。文房具や食器、アパレルなど多様なムーミングッズが展開され、日常の中で親しまれている点が特徴です。また、日本独自のコラボレーションや期間限定イベントなど、積極的なプロモーションも行われています。2019年には、埼玉県飯能市にムーミンの世界観を体感できるテーマパーク「ムーミンバレーパーク」が開業し、作品の魅力を“体験”として提供する場が生まれたことで、ムーミン文化はより一層広がりを見せています。



考察

北欧らしさを象徴するムーミン

このように、スウェーデンではなくフィンランドが日本人に高い人気を持つ背景には、ムーミンの存在が大きく影響していると考えられます。ムーミンの物語には、自然を大切にする価値観や多様性を受け入れる姿勢など、多くの北欧的要素が描かれており、それが「北欧らしさ」を象徴する作品となっています。日本ではキャラクター文化が深く浸透しているため、ムーミンは北欧を代表するキャラクターとして親しまれ、「フィンランド＝ムーミン」というイメージが定着したのではないかと考えられます。実際に万博でのアンケートにおいて、フィンランドが最も関心を集めた結果も、スウェーデンには同様に北欧らしさを直感的に想起させるキャラクターが少ないため、フィンランドの方がより印象に残った可能性があると考えました。

まとめ

日本と北欧を繋ぐ架け橋

これまで、北欧パビリオン・スウェーデン政府代表へのインタビュー、万博でのアンケート調査、フィンランドセンター所長の話から、北欧が持つ価値観や魅力、日本人の北欧に対するイメージが多面的に見えてきました。中でもムーミンは、日本人にとって北欧を身近に感じる存在として重要な役割を果たしており、日本と北欧をつなぐ文化的架け橋となっていることがわかりました。

「未来の働き方の模索：ワークライフインテグレーションの可能性」

荒川 七海、井手 満菜、伊藤 翔凜、今井 幹太、金子レイチェル奈々、坂口 翔竜、仲間 侑大、成清 大輝、山口 彩華

活動内容の一つ目として、丸井グループ人事部のご協力のもと、未来の働き方を探求するインタビューセッションを実施しました。今回は、日本とは全く異なった労働文化を持つデンマークのコペンハーゲン大学より、働き方について研究している大学院生の方を招き、鈴木ゼミの学生3名と共に丸井グループを訪問しました。「ヒト」を大切にせる企業文化や日本の労働習慣について、世代や国境を越えた対話を行いました。

まず初めに、丸井グループの社外取締役の一人にデンマーク人がいるという事に私たちは驚きました。インタビューの中で、社員の方から語られた「競争を高めていくという古い文化ではなく、皆で協力していくという人間本来の価値観をもとに、働き方を変えていきたい」という言葉は、私たち学生に新たな視点を与えてくれました。個々の対立ではなく共創（丸井グループの社員の方は“CoCreation”という単語を何度も強調されていました。）を重視するこの姿勢こそが、これからの時代において組織が成長するための鍵になるという認識を共有することができました。

また、日本の労働文化が抱える課題についても議論しました。多くの企業が変革を阻まれているのは、決して変わる意思がないからではなく、ただ「どうすれば変わるか」という具体的な方法が分かっていないだけではないか。もし変革への確かな道筋さえ見つければ、日本の企業社会には大きく変わるチャンスが満ち溢れているのではないかと、という前向きなお話をいただきました。

二つ目に、日本における働き方の価値観を把握することを目的として、学生と社会人の男女約100名を対象にワークライフバランス（WLB）とワークライフインテグレーション（WLI）に関する意識調査を実施しました。

結果、日本では生活と仕事を切り分けたいという志向が依然として強く、回答者の約70%が「分けたい」と回答しました。特にWLBを支持する最大の理由として「生活と仕事の境界が曖昧になることへの不安」が77.8%を占めており、働きすぎや責任の重さに対する警戒感が根強いことが確認できました。

一方でWLIに対しては、79%が「自分のスタイルに合わせた働き方が可能」と回答しており、価値そのものは理解されていることも明らかになりました。ただし、「魅力は感じるが現実的には難しい」という受け止め方も強く、背景として71.1%が長時間労働を課題として

挙げたほか、休暇取得の難しさや年功序列など、労働慣行に対する不満も多く挙がりました。これにより、WLIを選択肢として受け入れるための制度面や働き方の裁量が十分に整っていない現状が浮き彫りとなりました。

以上の結果から、WLIは理念としては支持される可能性があるものの、日本において価値観として広げるには、労働環境そのものの改善が不可欠であり、時間を要することが明らかになりました。

この意識調査をもとに、丸井グループ人事部の方に結果の共有とイベント企画の打ち合わせを行いました。（※イベントは3月実施予定）

丸井グループとの打ち合わせの様子



WLIとWLBを比較説明したポスター

Work Life Integration (WLI)

仕事とプライベートを融合させることで
相乗効果を生み出すという考え方

WLIは北欧で広く実践されている働き方の基となる
生活と仕事を調和させることで、生産性と幸福度を高める発想。
北欧諸国は働き方の柔軟性が高く、
「仕事は人生の一部であり、人生を豊かにするもの」という価値観が浸透している。

- 固定勤務ではなく「個人の生活と調和する働き方」
 - 時間よりも成果（アウトカム）を重視
 - 家庭・育児・余暇の優先を尊重
- という文化が根付いている。

現在日本で浸透しつつあるWork Life Balance(WLB)は異なる考え方！

Work Life Integration

仕事と私生活を「混ぜて」調和させる考え方。
自分の生活に合わせて働き方を最適化する。

- 柔軟に働け、生産性が向上しやすい
- 働く場所・時間の自由度が上がる
- 自己のスタイルに合わせた働き方ができる
- 相互補完しやすい組織体制を構築できる

メリット

- プライベートと仕事の境界が曖昧
- メンバー間の不公平感が高まる可能性がある
- 組織側の理解や制度が必要不可欠である

デメリット

例えば・・・

- オフィスで仕事の合間に
歯医者の予約や旅行の航空券手配
- 娘のピアノの発表会があることを
同僚や上司に共有し、会議の時間を調整する

Work Life Balance

仕事と私生活を「分けて」均衡させる考え方。
オンとオフをはっきりさせる。

- オン・オフが明確で切り替えやすい
- チームで同じ時間働くため連携しやすい
- 生活のパターンが安定しやすい

- 時間の柔軟性が低い
- 仕事と家庭・学業の両立が難しい
- 突発的な予定に対応しにくい

例えば・・・

- 会議や業務は勤務時間内に集約し
定後は一切業務をしない
- 子どもの行事（授業参観・面談）は
有給休暇を使って参加する

WLIの一日例 小学生の子供がいるフルタイム社員の

6:30-	起床・朝食・子どもの支度
7:30-	子供を送り出す
8:00-11:00	自宅でテレワーク
11:00-	家事・買い物
12:00-13:00	昼食
13:00-15:30	オンライン会議・作業
15:30-	子供の迎え・宿題のサポート
16:30-18:00	再び作業
19:00-	夕食・片付け
20:00-22:00	家族時間・入浴
22:00-	子供の寝かしつけ、メール返信
23:00-	就寝

WLBの一日例

6:30-	起床・朝食・子供の支度
7:30-	子供を送り出す・自分も出社
9:00-12:00	仕事
12:00-13:00	昼休憩
13:00-17:30	仕事
18:00-	買い物
18:30-	学童迎え・帰宅
19:00-	夕食・片付け
20:00-21:00	宿題サポート・家族時間
21:00-21:30	入浴
22:00-	子供の寝かしつけ・自分時間
23:00-	就寝